



記入日 2015年1月5日

1. 概要

実践団体名	仙台市立 南吉成 中学校		
連絡先	022-303-4327 (校長室)		
プランタイトル	南吉成中学校と地域が協働する防災教育活動プラン		
プランの対象者※1	中学生、小学生(高学年) 地域住民、保護者、他	対象とする 災害種別※2	災害全般

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント!】

本プランは、少子高齢化や核家族化が進み、住民の絆が薄れつつある地域において、中学生が主導する防災・減災の教育活動を実践し、自然災害に対する地域防災力を高め、持続可能な地域社会を担う人材を育成する。実践では、中学生の教育活動に住民等の協力・支援を受けることで、地域を巻き込み、防災教育を通じて学校・地域・家庭の協働体制化を図り、地域活性化にも資する。更に本プランでは汎用性、継続性、発展性、有効性等の追究・検証を重ねている。

【プランの概要】

- ①中学生が主導する地域防災訓練：中学生が避難所開設・運営、炊き出し、集団避難誘導等の6班を担当し、町内会等の学校・地域支援組織が各班を分担支援する形で訓練を実施する。
- ②津波被災農家に弟子入り体験：津波被災農家に苦難から立ち直るまでの講話をいただき、その後日に農作業を手伝い、交流活動を通じて農家の方々から生き抜く力の糧を学ぶ。
- ③校内・炊き出し調理コンテスト：クラスの生活班単位で実施し、災害用米炊き袋を使用するなどの条件の下、班でメニューを考え、競い合うことで炊き出しに関する知識とスキルを学ぶ。
- ④仙台復興シンボルイベントの支援：全国から観光客が来る仙台七夕等のイベントで、本校の2割を超える生徒・約70名が志願してゴミ回収や清掃の奉仕活動を行う。
- ⑤防災教育の学習成果発表会：3年生が10テーマに分かれて調べ学習した成果を、①の訓練日に住民や保護者、小6と中1・2年生等にポスターセッション形式で発表、質疑を行う。

【期待される効果・ここがおすすめ!】

防災教育の実践を通じて、地域貢献活動による奉仕的精神を培い、防災・減災の意識と行動力を高め、防災対応能力を育むことができる。そして、中学生が主導する地域防災訓練では、地域を巻き込む防災教育が災害時の自助・共助の方策を形作り、地域防災力の向上に資するものとなる。将来的には、この防災教育活動を通じて、地域防災を担う要となる人材が生まれ、生徒・保護者・住民など世代を超えた防災の協働体制が構築され、地域の活性化と安全・安心な地域づくりに波及する可能性がある。本プランの継続は、これらの期待される成果・効果とともに、住民間の絆を強め、持続可能な地域社会を担う人材を育成できる可能性を高めていく。

2. プランの年間活動記録 (2014 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4月	今年度の計画等の検討作成	活動計画の決定	年間計画策定と活動内容の協議決定
5月	5/29 学校支援組織の総会	計画の協議検討	活動概要の説明・検討と支援依頼等
6月	被災農家等との連絡調整	協力先との渉外	農家等の協力先との協議・依頼
7月	○7/11 津波被災農家の講演 (全校生徒 290、保護者 100 人参加) ○7/25 津波被災農家に弟子 入り体験学習 (除草作業) (全校生徒 290、保護者等 28 人参加)	農家と連絡調整 を図り、体験学習 の前に講演して いただく。	○農家 4 人が地震・津波の体験と農業 再生・復興・未来への道のりを講話 ○津波浸水の小学校舎と慰霊塔を視 察し、震災当日の状況を現場で聴く。 その後、綿花畑の除草作業を手伝う。
8月	○8/1 仙台七夕・会場とその 周辺の清掃奉仕 ○8/6~8 七夕会場でのゴミ 箱設置とゴミ回収・清掃	仙台商工会議所 と商店街組合の 協力依頼と連絡 調整	○希望生徒 82 人が七夕会場とその 周辺の清掃活動を行う ○七夕開催の三日間、延べ 76 人の生 徒が七夕会場の膨大なゴミを回収
9月	○生徒会と教員が地域防災 訓練の企画・計画の検討	生徒会が企画し 計画・準備、実行	生徒会と教員が 11 月の地域防災訓練 の実施企画と計画等を立案・検討
10月	○10/3 ユネスコスクール 東北大会で 1 年生が合唱披 露、生徒会がプレゼン発表 ○10/17 本校文化祭にて防 災教育等の学習成果発表 ○10/29 校内炊き出し調理 コンテスト	○合唱の練習と プレゼン発表の 指導 ○プレゼン作成 の支援・指導 ○使い捨て器等 の消耗品の購入	○東北各地の先生方 100 人を前にし て、1 年生約 100 人が復興ソングを合 唱、生徒会が防災学習成果を発表 ○本校生徒と保護者等に、生徒代表が 防災学習の成果をプレゼン ○1 年生 3 クラスの生活班、15 班が 炊き出しメニューを考え、競い合う。
11月	○11/14 中学生が主導する 地域防災訓練 ○11/16 津波被災農家に弟 子入り体験学習 (収穫作業) と合唱・吹奏楽演奏を披露	生徒会が実施計 画・内容等を決定 被災農家との連 絡調整(今年の約 100 人増を受入)	○生徒会が中心となり、3 年生が 6 班 に分かれて訓練を実施(小 6・100 人参加) ○1・2 年生 200 人と保護者 10 人が参 加し、午前に綿花を収穫、午後の収穫 祭で仮設住民等 200 人に合唱を披露
12月	○12/3 仙台・光のページェ ント清掃奉仕活動(不参加)	主催の青葉区役 所との連携・協議	○H26 は学校行事の関係から、主催者 と協議したものの日程調整で不可
1月	活動成果等の分析・検証	データ分析	検証による成果や課題等を抽出
2月	まとめと外部発信	報告書等の作成	教育実践の成果等を外部に発信 (ユネ スコスクール、防災教育チャレンジプラン等)
3月	次年度の企画・計画の立案	検討・協議	検証・改善の結果を計画に反映




3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： ①】※3

S P(警視庁の要人警護をする警察官)にも準え
地域の子供から高齢者まで全てが地域の要人と捉え

タイトル	「南吉成 学校・地域支援組織」の“MY・SP隊”活動と拡充 (<input checked="" type="checkbox"/>)なみ (<input checked="" type="checkbox"/>)しなり 小学校・中学校 (<input checked="" type="checkbox"/>)クール (<input checked="" type="checkbox"/>)プロジェクト チーム)			
実施月日(曜日)	5月29日(木)、9月30日(火)、11月12日(木)、14日他			
実施場所	本校・視聴覚室等			
担当者または講師	担当者の区分：会長・ 連合町内会長 講師等の区分：校長 所属・役職等：(組織側) 町内会長、交番所長、各団体等の長 (学校側) 校長、教頭、防災教育主任、生徒会の生徒など			
所要時間	会議：14:00～16:30、 活動等：放課後や長期休業などに活動			
プログラムの カテゴリ、形式※4	その他(防災教育の実践化を図るための学校・地域支援組織の拡充)			
活動目的※5	3 災害に強い地域をつくる ：地域の教育力や防災力を高める学校・地域支援組織の活動拡充			
達成目標	中学生と世代を超えた地域住民等による安全・安心な地域づくり			
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	<p>これまで設置されていた「青少年健全育成協議会」の活動は、長期休業中の巡視活動や健全育成標語の募集・表彰、講演会の開催など、青少年の健全育成の活動を行ってきた。</p> <p>そこで、昨年度の5月に右図の通り、「南中・学校・地域支援組織」として拡充を図り、これまでの組織の目的に防災教育の視点を付加し、新たに参画する地域組織を含めて発足している。</p> <p>発足後も、新たに参画する組織との交渉を重ね、既存組織の構成団体等から更に組織拡充を図る。小学校の学校支援・地域本部も加えて教育支援力を向上させ、学校と地域の双方性の支援の強化を行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">南中 学校・地域支援組織 チームMY・SP 設立</p> <p style="text-align: center;">既存組織「青少年健全育成協議会」を拡大</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>《既存組織の構成》</p> <p>①防犯協会、②交通安全協会、③交通指導隊、④民生児童委員、⑤婦人会、⑥交番所、⑦7つの町内会長、⑧社会福祉協議会、⑨小中・健全育成委員会、⑩小中・生徒指導担当者会</p> </td> <td style="width: 10%; text-align: center; vertical-align: middle;">+</td> <td style="width: 40%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>《新たな参画組織》</p> <p>A 体育振興会 B 消防団 C 婦人防火クラブ D 老人会 E 市民センター F 児童館</p> </td> </tr> </table> <p style="text-align: right; margin-top: 5px;">E 学校支援地域本部(追加)</p> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>【組織目的】 青少年の健全育成を目指し、学校・家庭・地域が協力・連携して、広い視野から地域ぐるみ指導の充実促進を図る。</p> <p style="color: red; font-weight: bold;">防災教育の視点を付加</p> </div>	<p>《既存組織の構成》</p> <p>①防犯協会、②交通安全協会、③交通指導隊、④民生児童委員、⑤婦人会、⑥交番所、⑦7つの町内会長、⑧社会福祉協議会、⑨小中・健全育成委員会、⑩小中・生徒指導担当者会</p>	+	<p>《新たな参画組織》</p> <p>A 体育振興会 B 消防団 C 婦人防火クラブ D 老人会 E 市民センター F 児童館</p>
<p>《既存組織の構成》</p> <p>①防犯協会、②交通安全協会、③交通指導隊、④民生児童委員、⑤婦人会、⑥交番所、⑦7つの町内会長、⑧社会福祉協議会、⑨小中・健全育成委員会、⑩小中・生徒指導担当者会</p>	+	<p>《新たな参画組織》</p> <p>A 体育振興会 B 消防団 C 婦人防火クラブ D 老人会 E 市民センター F 児童館</p>		
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	地域の教育力や防災力を高めるために関わる地域の人的組織(6町内会長、民生委員、婦人会、消防団、PTAなど12→18組織へ)			
参加人数	会議の参加者：各組織の代表56名、 活動への参加者：各組織の所属者(本校学区の地域住民のほぼ全て)			
経費の総額・内訳概要	在校生の家庭からの協力金・約10万円と市からの助成金4.5万円			
成果と課題	【成果】世代を超えた地域防災力の向上や青少年の健全育成に資するなど、広い視野・分野から地域ぐるみで学校教育を支援 【課題】本支援組織には、高齢者から働き盛りの方々まで幅広い年齢層が属し、会議等の設定が困難・共通理解不足が生じがち			
成果物	成果物としては、青少年の健全育成と地域防災力の向上を目指し、学校・家庭・地域が協力・連携して、多彩な地域人材による広い視野と分野から地域ぐるみで教育・指導の充実促進が図れていること。			

【実践プログラム番号： ② 】※3

タイトル	津波被災農家の方々による講演
実施月日（曜日）	平成26年 7月11日（金）
実施場所	本校・体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：外部講師 氏 名： 渡邊静男氏、他3名（津波被災農家の方々） 所属・役職等：(株) 仙台荒浜アグリパートナーズ代表取締役など
所要時間または「コマ数×単位時間」	13:30～15:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	3 講演会・シンポジウム
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める
達成目標	津波被災農家の方々から、地震と津波による辛く悲しい苦悩の日々の体験談を聴くと共に、そこから立ち直って農業再生・復興への道のりや心の変容を教えていただくことにより、どんな苦難にも立ち向かう勇気と力を知り、生き抜く力の糧を学び取る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、講演依頼：平成24年度から講演会を開催し、今年度も快諾</p> <p>2、講演会の開催</p> <p>(1) 講師：津波で被災した農家の方々・4名</p> <p>(2) 講演内容：4人の講師がそれぞれの震災の体験談と、震災後の家族も含めた生活、そして心の葛藤・変容と、前向きに生き抜くための希望や夢を赤裸々に講話</p> <p>(3) 質疑：講演から生徒が抱いた思いや感動を講師に伝え、自らが感じ得た将来への決意や希望などを述べ、講師からコメント・励ましを享受</p> <p>3、講演会の様子・・・4人の講話と質疑、会場に綿花製品が展示</p>    
	※ 講演を聴き、7月・11月の津波被災農家に弟子入り体験を実施



準備、使用したもの ・人材・道具、材料等	本校生徒が昨年度に農作業の奉仕活動を行い、製品化された綿花商品を、被災農家の協力を得て展示																				
参加人数	<p>この講演会は平成24年度から開催し、本年度で3回目となる。これまでの参加者とその人数を以下に示す。</p> <table border="1" data-bbox="571 409 1386 768"> <thead> <tr> <th></th> <th>生徒数</th> <th>保護者数</th> <th>教員数</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成24年度</td> <td>1年生 107人</td> <td>1年生の 74人</td> <td>8人</td> <td>189人</td> </tr> <tr> <td>25年度</td> <td>1・2年生 212人</td> <td>1・2年生の 132人</td> <td>15人</td> <td>359人</td> </tr> <tr> <td>26年度</td> <td>全校生徒 290人</td> <td>全校生徒の 100人</td> <td>22人</td> <td>412人</td> </tr> </tbody> </table> <p>参加する生徒を年々拡大し、平成26年度の3年生は24年度から3回目の参加となる。しかし、保護者の参加については、24・25年度は祝日「海の日」に開催し、今年度の開催日を平日としてためか、参加者が減少している。</p>		生徒数	保護者数	教員数	合計	平成24年度	1年生 107人	1年生の 74人	8人	189人	25年度	1・2年生 212人	1・2年生の 132人	15人	359人	26年度	全校生徒 290人	全校生徒の 100人	22人	412人
	生徒数	保護者数	教員数	合計																	
平成24年度	1年生 107人	1年生の 74人	8人	189人																	
25年度	1・2年生 212人	1・2年生の 132人	15人	359人																	
26年度	全校生徒 290人	全校生徒の 100人	22人	412人																	
経費の総額・内訳概要	<p>講師の皆さんは無償にてご支援・ご協力をいただいております。 ※ 本校では津波被災農家に、夏に畑の除草作業と秋に収穫作業を支援をしていることもあって無償にてご理解をいただいております。</p>																				
成果と課題	<p>【成果】津波被害を受けてない生徒たちは、同じ仙台市内でも被災状況の違いを知り、未だ復旧にいたらずに不自由な仮設住まいを強いられている現況を学ぶ。さらに、どんな苦難にも負けず、前に進もうとしている方々から、生き抜く力の糧を学び、逆に励ましと希望、勇気をいただいている。</p> <p>【課題】震災前の生活にもどっている本校生徒たちが、農家の方々から学んだ教訓を継承するため、今後どのような教育活動を行うべきか、生徒だけでなく本校教職員が問われている。</p> <p>また、保護者の参加率を高めるために、昨年度までの開催日「海の日」を次年度の開催予定日としたい。</p>																				
成果物	生徒作文、報告書																				

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号： ③】※3

タイトル	津波被災農家に弟子入り体験学習	
実施月日（曜日）	7月25日(金)、11月16日(日)	
実施場所	仙台市若林区荒浜（仙台市の沿岸部）	
担当者または講師	担当者・講師等の区分：津波被災農家の皆さん 氏 名：渡邊静男氏、他十数名（津波被災農家の方々） 所属・役職等：(株) 仙台荒浜アグリパートナーズ代表取締役など	
所要時間または「コマ数×単位時間」	8：30～16：30	
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間 1 3 体験学習	
活動目的※5	1 0 その他（被災農家への奉仕支援活動）	
達成目標	<p>津波被災農家が塩害のために稲作をできない畑で綿花を栽培し、農業再生・復興に向けて尽力している姿から、何事にも諦めない力強い精神力を、生徒が支援活動を通して体験的に知り、自らの生き抜く力の糧として学び取る。</p> <p>生徒は綿花畑で真夏に除草作業と初冬に綿花収穫作業を行い、農業作業の大変さと苦勞を体感的に理解する。それと共に、助け合い支え合う心の育成と奉仕的精神を培う。</p> <p>この弟子入り体験は昨年から継続しており、生徒は自らの地域と比較して津波被災地の復旧・復興の様子とその進捗状況を確認している。生徒はいまだに元の生活に戻れない、戻る見込みもない方々の存在を知り、自分に何ができるのか、何をしなければならないのか、様々な考えや思いを抱き、そこから自らの発想により新たな取組が生まれることを願い、ねらいとする。</p>	
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、事前打ち合わせ：農家の方々と今年度の計画・内容等の検討</p> <p>2、津波被災農家の方々による講演：実践プログラム②に示したように、弟子入り体験の前に農家の方々から「地震・津波の体験と農業再生・復興への道のり」について講話をいただく。</p> <p>3、弟子入り体験「綿花畑の除草作業」：7月25日(金)</p> <p>(1)津波被災地の視察 9：00～ H24年は家の土台だけが残る津波被災地を視察し、H25年は津波が校舎三階まで到達した小学校を見学している。今年は小学校を視察した後、やっと今年に建立された慰霊塔の前で震災当日の様子をお聞きしている。</p>	
		
3階まで津波が襲来した小学校	4階教室に残る避難者のメッセージ	今年に建立された慰霊塔の前で講話

(2) 綿花畑で除草作業 12:30～

今年も30度を超える真夏日に、綿花畑に生い茂る雑草を抜き取る。年々、参加生徒が増え、今年には全校生徒が参加することになり、より広く畑の除草ができた。



綿花栽培と農作業の説明を聞く



広大な綿花畑に生徒たちが散らばって除草作業



4、弟子入り体験「綿花の収穫作業」：11月16日(日)

(1) 綿花畑で収穫作業 10:00～

今年是小雨交じりの寒さで作業も大変だったが、棉花の収穫も順調に行われた。しかし、今年も悪天候が続いたことから、昨年と同様に棉花の生育が遅れ、棉花の白い綿が膨らまず、固い殻に包まれた棉花の実を収穫している。



収穫の仕方の説明を聞く



根こそぎ収穫し、固い殻の棉花の実を綺麗にする



(2) 被災農家と支援者の方々と収穫祭に参加 12:30～

収穫が終わって、昼食を農家や支援者の皆さん約200人と食べながら交流を図った。本校の吹奏楽部が2曲を演奏、1・2年生の約200人が仙台市復興ソング等の2曲を合唱し、皆さんの前で披露している。



吹奏楽部の演奏



農家等の皆さんに、約200人の生徒が合唱を披露



準備、使用したもの
・人材・道具、材料等

- 津波被災農家の方々が、被災地と津波被災の小学校や今年建立した慰霊塔などを案内・説明、除草作業と収穫作業を指導支援
- 生徒は軍手、タオル、弁当、水筒などを持参
- 農家や支援者等の皆さんに、合唱と吹奏楽部の演奏を披露するのに使用する楽器を準備



参加人数	平成24年度から行っている本実践は、以下の表のように年々、参加生徒を加え、本年度には全校生徒の取り組みとして拡充している。				
		生徒・保護者・教員の参加者数			
		平成24年度	平成25年度	平成26年度	
	7月下旬	○被災地の視察(若林区荒浜) 荒浜小学校・校舎 荒浜地区と慰霊塔 ○綿花畑の除草作業	1年生 106人 保護者 7人 教員 7人 計120人	1・2年生 198人 保護者 10人 教員 14人 計222人	全校生徒 288人 保護者 9人 教員 18人 計315人
	11月中旬	○綿花畑で収穫作業 綿花の収穫・枝葉の回収 ○収穫祭での被災者等と交流 参加生徒全員で合唱披露	1年生 107人 保護者 8人 教員 8人 計123人	1・2年生 197人 保護者 12人 教員 15人 計224人	1・2年生 197人 保護者 9人 教員 14人 計220人
	※ 平成26年度は、7月に全校生徒が参加、11月の綿花収穫は3年生が高校入試の学習のために不参加				
経費の総額・内訳概要	バス借り上げ代：1台 35,700円 × 6台 × 2日 = 428,400円				
成果と課題	<p>成果と課題の抽出、分析、検証には、生徒を対象にアンケート調査を実施している。調査は「マスコミ報道について」「被災地を視察して」「奉仕活動について」「これからの自分」の4観点で構成し、観点ごとに5つの質問項目からなり、5件尺度法による質問紙で行う。調査はH24～H26年の3年間にわたり、毎年の7月と11月の農作業後に調査を行ってきた。以下に調査結果を比較し、分析する。</p> <p>(1) マスコミ報道について 項目「大変なことが起きていると感じる」について、選択肢“大いに”を選択している割合は、H24～H26年のいずれも7月に1年生に調査した結果、H24・89.8→H25・98.9→H26・88.0%と非常に高く、大震災のもたらす影響が継続していることが分かる。また、項目「テレビ等の報道で、これからの生活に心配や不安を感じる」について、選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合でH24～H26年のいずれも7月に1年生に調査した結果を比較すると、H24・72.8→H25・72.6→H26・76.0%であり、震災から時間が経てもマスコミ報道による心配や不安が生じている。マスメディアによる影響は、癒えない心情を継続させていることがわかる。</p> <p>(2) 被災地を視察して (1)と同様にH24～H26年のいずれも7月に1年生に調査した結果を比較分析する。項目「被災地の復旧・復興に自分の力を活かしたい」について、選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合では、H24・95.4→H25・94.5→H26・96.0%であり、真夏の除草作業で大変な思いをした後にもかかわらず、ほぼ全ての1年生が毎年同じ思いと願いを強く抱いている。また、項目「被災地のために、何ができるか考えたい」で選択肢“大いに”を選んでいる割合は、H24・60.2→H25・55.4→H26・64.0%であり、選択肢“まあまあ”を含めるとどの年度の1年生ともに90%を超え、きつく辛い体験後であったも積極的かつ自発的な思いを強化している。</p> <p>(3) 奉仕活動について (1)と同様にH24～H26年のいずれも7月に1年生に調査した結果を比較分析する。項目「人が人を助けることは大切なことだ」について、選択肢“大いに”を選んだ割合は、H24・90.9→H25・85.9→H26・90.0%であり、どの年度の1年生も100%になっていない。しかし、選択肢“まあまあ”を加えると、どの年度の1年生も98%以上になっている。非常に高い割合になっているものの「人が人を助けること」を全ての生徒が「人として当たり前」と考えられるよう</p>				



に育むことが必要かつ重要であると考え。また、項目「自分の力が人のために役になって、うれしいと思う」について、選択肢“大いに”を選んだ割合は、H24・77.0→H25・77.2→H26・76.0%であり、選択肢“まあまあ”を含めるとどの年度の1年生も94.0%以上であり、成功体験と自己有用感を高めているものと考え。

(4) これからの自分

(1)と同様に H24～H26 年のいずれも7月に1年生に調査した結果を比較分析する。項目「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたい」について、選択肢“大いに”を選んだ割合は、H24・77.3→H25・79.3→H26・84.0%であり、どの年度の1年生も「人を助け、支え合うこと」が人として大切であることを認識している。

また、項目「これからも、人のために役立ちたい」でも選択肢“大いに”では、H24・76.1→H25・72.9→H26・76.0%であり、7割以上を占めていることから、活動を通じて奉仕的精神が培われていることが分かる。その他の項目「自分にできることにチャレンジ」「人に夢や希望、勇気を与えたい」「苦難を乗り越える努力をしたい」でも選択肢“まあまあ”を含めると8割以上になり、弟子入り体験が生徒に素晴らしい影響と成長を促していることが確認できる。

次に、本実践は H24 年度に1年生を対象として行って以来、毎年参加生徒を増やして実施してきた。そこで、H24 年度の1年生がこの3年間でどのように変容したかを、比較分析すると以下のような特徴が検出できた。

平成24年度・入学生徒を対象とする「毎年7月の被災地視察と除草作業」後の調査結果

NO	調査項目	選択肢“大いに”の割合の変容		
		H24・1年生	H25・2年生	H26・3年生
3	被災の状況をもっと知りたいと感じる	59.8	62.1	74.7
8	被災地の復旧・復興に、自分の力を活かしたいと思う	67.0	69.0	77.2
9	被災地の復旧や復興は難しいと感じる	45.5	40.2	24.1
17	自分にできることを探し続け、チャレンジしたいと思う	63.6	71.3	79.7
18	人に夢や希望、勇気を与えられる人になりたいと思う	65.9	72.4	75.9
21	自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたいと思う	80.7	79.3	83.5

N03・8・17・18の4つの調査項目は、平成24年度の入学生が学年を上がるたびに選択肢“大いに”割合が高まりつつある。このことから、1年生から3年生に進級するたびに、「被災地の状況を知る」「復旧・復興に自分の力を活かしたい」「できることを探し続け、チャレンジしたい」「人に夢や希望、勇気を与えられる人になりたい」という思いが体験を重ねることで高めている。つまり“被災状況を知り、自分の力を活かして、自分にできることを探し続けてチャレンジし、人に夢や希望、勇気を与えられる人になりたい”と、多くの生徒たちがより強く目指すべき自分を想定認識しているものと考え。N09は学年が上がるたびに低下しており、被災地の状況を視察し続けて復旧・復興が徐々に進んでいることを感じていることが分かる。そして、N021では3年間を通じて8割近く、それ以上の割合を維持しており、“自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたい”と、被災農家の講話や体験を受けて生き抜く力の糧や、自分の将来に向けて意欲と推進する力を学び取り、維持し続けているものと考え。

成果物

平成24年度～平成26年度の調査分析による比較検証報告



【実践プログラム番号： ④】※3

タイトル	仙台復興のシンボルイベントでの清掃奉仕活動 ー 本校・健全育成ボランティア組織「アルカス隊」の取組 ー
実施月日（曜日）	仙台七夕・前：平成26年8月1日(金) ・当日：8月6日(水)、7日(木)、8日(金)
実施場所	仙台市青葉区中心街（イベント会場とその周辺）
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 仙台市青葉区安全安心街づくり推進協議会 仙台市青葉区一番町四丁目商店街振興組合
所要時間または「コマ数×単位時間」	仙台七夕・前：8月1日 → 13:30～15:30 ・当日：8月6、7、8日→9:30～11:30、13:30～15:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 イベント・行事 17 その他(復興支援のための清掃奉仕活動)
活動目的※5	10 その他(仙台復興シンベルイベントの支援)
達成目標	本推進協議会では、安全で安心して暮らせる住み良い地域社会の実現を目指す一環として、「仙台七夕まつり」前に環境美化活動を行い、県内外から訪れる多くの観光客に対して、美しくきれいな街仙台、安全で安心な街仙台をPRしている。このねらいを受け、本校の「アルカス隊」では清掃奉仕活動を“仙台の復興は自分たちの手で”という思いのもと、観光客が仙台復興イベントを気持ち良く楽しんでいただくことを願い、活動している。
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	8月1日には本推進協議会の方々と一緒に、生徒約70名がイベント開催会場とその周辺のゴミ拾い等の清掃活動を行っている。 仙台七夕の開催当日の8月6～8日の三日間には、商店街振興組合の協力・指導を受けて、延べ70名の生徒が祭会場で膨大なゴミの回収と清掃を行っている。
	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>仙台七夕・前</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>仙台七夕・当日</p>  </div> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div> </div>
準備、使用したもの	清掃活動に必要な軍手など
参加人数	推進協議会の活動では約70名の生徒、商店街振興組合には、三日間で延べ70名の生徒が参加
経費の総額・内訳概要	バス代（8月6～8日は生徒の自己負担）
成果と課題	生徒たちは、仙台の復興は自分たちの手でという思いを抱き、被災地仙台で行われる2つの復興シンボルイベントに、震災前の観光客数が復活することを願い、さらには観光客に綺麗な街仙台のイメージを抱いてもらい、祭を楽しんでいただくことを望んで活動している。生徒たちはその思いや願いを、活動によってゴミがない綺麗な街にすることで目標を達成し、昨年から続けているこの活動も今年の参加生徒が増加しており、成果が得られているものと考えられる。
成果物	本校「アルカス隊」は本活動により、平成25年度には青葉区推進協議会と青葉区長から、それぞれから感謝状を授与

【実践プログラム番号： ⑤】※3

タイトル	第3回 校内・炊き出し調理コンテスト
実施月日（曜日）	平成26年10月29日(水) [第1回 H24. 11. 28、第2回 H25. 10. 4]
実施場所	本校の調理室、理科室
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 本校の1学年教員とPTA役員
所要時間または「コマ数×単位時間」	2～4校時 9：50～13：15
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間 17 その他（炊き出し調理のスキル向上）
活動目的※5	9 災害対応能力の育成
達成目標	炊き出しは、被災者にとって生命に関わる食事であり、その反面、避難所生活が長期化する場合には炊き出しを食べて栄養を補給するだけでなく、美味しい食を味わって食べる喜びを提供し、生き抜く力の糧や意欲をも与えることが出来る重要な食事である。このため、被災状況下を想定して調理の条件を設定し、食べて栄養を取るだけでなく、短時間で調理しながらも美味しく、安く、早く、手軽に炊き出しをできる技能を身に付ける。さらに、有事の際に活かせるレシピを追究・提供できるようにコンテスト形式で競い合い、よりよい炊き出し調理の知と技を習得する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	1、実施の流れ ① 校内炊き出し調理コンテストの目的と実施内容・方法を説明 ② 生活班ごとに炊き出しレシピと調理方法等の企画を協議・検討して決定 ③ レシピの提出、コンテストの前日・放課後に食材を購入 ④ 炊き出し調理コンテストの実施 ⑤ PTA役員による炊き出し料理の審査と結果発表と講評 ⑥ 炊き出しレシピ集を編集し、冊子にまとめる 2、炊き出し調理の条件設定 震災下での炊き出し調理を想定し、次のような条件で炊き出し調理を実施する。 A、使える調理器具(調理室にあるもの；鍋、包丁、まな板など) B、盛り付け食器： 使い捨てのドンブリ・皿(一人ワンセット) C、食材と調理条件 ○ご 飯・・・無洗米を災害救助用・炊飯袋に入れ、水を入れて鍋に袋を入れて、火力を調節してご飯を炊く(炊き込みご飯も可)。 ○おかず・・・カット野菜や冷凍食品を除き、野菜等の食材を(H26は汁物を追加) カットするなど必ず調理の手を加え、煮る、焼く、炒める調理でおかずをつくる。 ○食 数・・・食数は班員+1名分を作り、+1名分は審査用とする。 D、調味料：第1・2回は、調味料を家から持参することにした。例えば、弁当に付いてくるビニールに入った醤油、ケチャップ、ソースなども使える。昨年コンテストでは、炊飯袋に舞茸とだし汁等を入れて炊き込みご飯にしたケースもある。今年は学校で準備することにした。

E、食材の購入：コンテストの前日・放課後に買い物に行き、学校から支給される一人 200 円の予算で班毎に食材を購入し、調理室の冷蔵庫等で保管する。

F、水道やガスの使用：これらは使用制限をしない。

G、調理時間：調理は 70 分以内とし、盛り付けも含める。
その後の 40 分間で、班員が試食・後片付けする。

3、審査について

(1) 審査基準：①栄養価、②美味しさ・味、③食欲をそそる盛り付けと見た目の良さ、④実用性(誰でも簡単に調理)、⑤60分の制限時間厳守(5分ごとに5点の減点)を、各20点として100点満点で審査する。

(2) 審査員と審査・講評：5人のPTA役員に審査員を依頼し、調理準備室にて審査を行う。審査員には、全ての班に講評を記入していただく。

4、平成26年度・第3回のコンテスト

(1) 実施学年・組 …1年1組～3組が同時に実施

(2) コンテスト会場…1組：調理室、2組：第1理科室、3組：第2理科室、審査室：被服室

(3) 平成26年度の結果

審査結果は、1組2班が348点を獲得して最優秀賞、次いで3組2班が343点で優秀賞、優良賞については1組3班が330点を獲得して入賞した。審査員による審査講評は、次の通りである。

賞	班	審査員の講評
最優秀賞	1組2班	○味は全体で一番美味しかった。 ○豚肉の味付けがよい。 ○味噌汁の味が薄いのが惜しい。
優秀賞	3組2班	○ハンバーグが美味しい。 ○見た目がとても綺麗だった。 ○味噌汁が味が薄め。
優良賞	1組3班	○盛り付けがとても綺麗です。 ○味噌汁が美味しくできていた。 ○にんじんが焦げているのが少し残念。

最優秀賞(1組2班)

優秀賞(3組2班)



優良賞(1組3班)





5、レシピ集の作成と活用

全ての班のレシピを冊子として作成し、校内に展示して生徒に炊き出しの興味・関心を持たせ、防災意識や防災対応能力とその知識・スキルの向上を図る。また、平成25年度から行っている「中学生が主導する地域防災訓練」でもレシピを展示し、保護者等に試食をしてもらうなど、学校や家庭そして地域の関わりを強める取組の一つとして実施する。

平成24～26年度のレシピ集は、第1学年・実施「校内・炊き出し調理コンテスト」として、以下のレシピ集としてまとめている。なお、生徒が考えた炊き出し調理レシピは、予め料理を提供する季節を想定し、次の区分に分けている。

【提供する季節の想定区分】

A、暑い夏 B、寒い冬 C、暑くもなく寒くもない春や秋
D、その他の季節・気候の時 [記入欄]

(1)平成24年度のレシピ集

組	班	炊き出し調理レシピ名	想定区分
1組	1	春の香りただよう絶品炊き出し和風仕立て	C
	2	色とりどりの六色丼、冷や奴	C
	3	ジバングのごくうま餃子グンパーハ	C
	4	Egg is my friend	B
	5	秋の食事	C
	6	6班のTAKIDASHI	C
2組	1	ほかほか温ったか簡単煮物	C
	2	体&心が温まる肉なし肉じゃが	B
	3	ボリューム大 あしもの気まぐれ生が焼き	D
	4	心温まるなつかしのお袋の味	C
	5	簡単! おいしい! あったかレシピ	C
	6	復興へ! ほくほく飯	C
3組	1	寒さに負けるな! ほかほかまいたけご飯	B
	2	ほくほくの黄金ケーキ	C
	3	仙台風 ☆ Like in	B
	4	食べてシャキシャキ!! 星空サラダ☆	C
	5	被災地復興 和風メシ	B
	6	心も体も温まる winter マジック !!	B

(2)平成25年度のレシピ集

組	班	炊き出し調理レシピ名	想定区分
1組	1	Very appy ほかほかごはん	D
	2	とつげき!! となりのたきだしごはん	C
	3	おいしくて Suてきな Saーもん DON☆	C
	4	あったかゴロゴロ スープ と 炊き込みごはん	C
	5	かんたん☆ 1組5班の低価格レシピ	C
	6	eAT たぬき Rice !?	C
2組	1	日本 THE 和食 !!	C
	2	冬に食べたい! あったかジューシーあぶらふ井	B
	3	秋のぽかぽか・ごはん	C
	4	心まで温まる 具たくさん料理	B
	5	われらのご飯! 究極のDON	C
	6	～秋にピッタリ! 簡単炒め物～	C
3組	1	栄養たっぷり きらきらご飯	C
	2	2班の特製 秋冬ご飯	C
	3	スタミナ☆ご飯	C

組	4	ほかほか！ 豚丼と野菜炒め	D
	5	心が温まる 激うまランチ！	C
	6	こりゃ絶品！ とろとろ親子丼と秋の味噌汁	C

(3)平成26年度のレシピ集

組	班	炊き出し調理レシピ名	想定区分
1組	1	納豆チャーハンもやし添え丼	C
	2	豚豚丼丼 (ブタブタドンドン)	C
	3	黄金のメシ	C
	4	超絶のあんかけ丼	B
	5	豚肉と野菜の炒め丼	C
2組	1	いろいろ丼	C
	2	豚づくし丼	B
	3	秋野菜の炒め丼	C
	4	彩り丼 (いろどりどん)	C
	5	牛もしいキュ かまねぎ丼	C
3組	1	なんちゃってビビンバドーン	B
	2	野菜ハンバーグ丼	C
	3	ひき肉炒めて にくみそドン	C
	4	Wどんどこ丼	C
	5	Great チャーハン&ポトフ	B

平成26年度 炊き出し調理コンテストの様子

理科室で調理

災害救助用炊飯袋でご飯作り



【PTA役員による審査の様子】

【H26 調理後の食事の様子】

準備、使用したもの
・人材・道具、材料等

調理器具：調理実習室にある鍋、フライパン、包丁、まな板、
消耗品：災害救助用炊飯袋、使い捨て器、割り箸、無洗米など
協力者：審査委員として本校PTA役員5名

参加人数

1年生78名、PTA役員5名

経費の総額・内訳概要

[78人+15班(3組×5班)] ×200円=18,600円



成果と課題

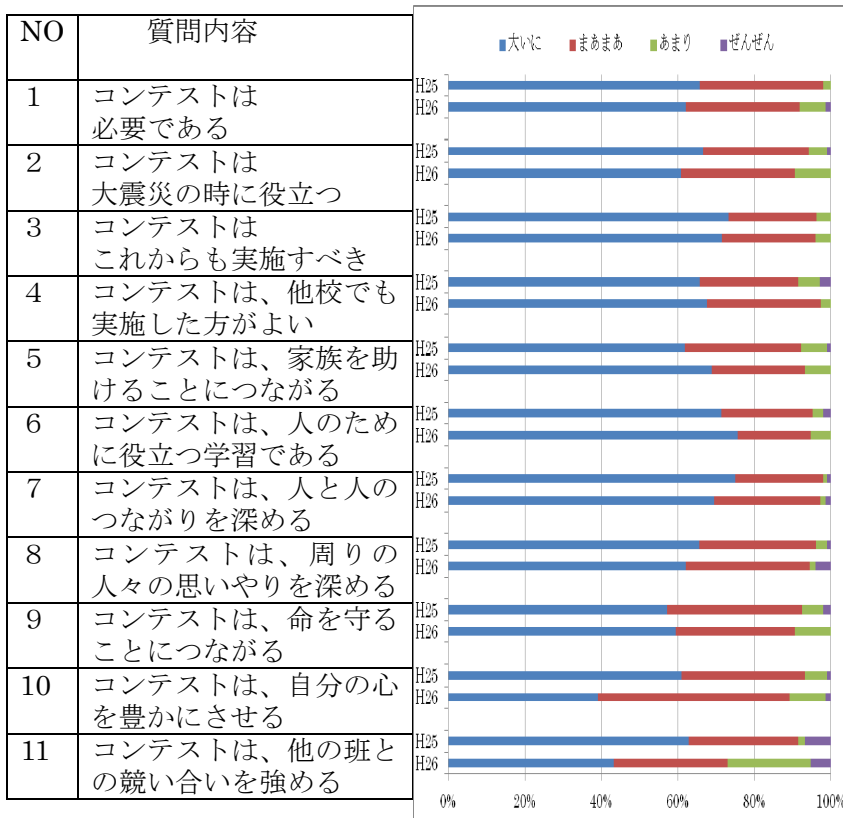
平成25・26年度のアンケート調査について

平成25・26年度にコンテストの後、1年生・全員を対象としてアンケート調査を実施し、その結果について以下に示す。

(1)「炊き出し調理コンテスト」について

このアンケート調査では、コンテストについて生徒の思いや考えなどを抽出する。集計結果は、グラフの通りであり、その分析について記述する。

選択肢「大いに」と「まあまあ」をあわせると、NO11を除く全ての項目で2カ年ともに9割を超えている。特に、NO3“コンテストはこれからも実施すべき”とNO7“人とのつながりを深める”においては、95%以上に達している。



また、選択肢「大いに」に着目して H25 から H26 と割合が高まっている項目は、NO4 “他校でも実施すべき”、NO5 “家族を助けることにつながる”、NO6 “人のために役立つ”、NO9 “命を守ることにつながる” の4項目である。これらのことから、生徒は「コンテストが人のために役立ち、家族を助けることにつながり、延いては命を守ることにつながる。だから、コンテストを他校にも広げるべきである。」という考察を導き出せるものと考え。

ただし、NO10 “自分の心を豊かにさせる” ことについては、選択肢「大いに」を両年で比較すると、H25 が 61.0、H26 が 39.2%と大きな差がみられ、この原因の検証を行う必要がある。

(2)「炊き出し訓練」について

次に、炊き出し訓練について、生徒がどの様に捉えているかを2カ年の比較とともに調査結果を分析してみた。

まず、選択肢「大いに」が H25 より H26 に高まった項目を抽出すると NO1 “中学生が訓練することは大切”、NO9 “自分は調理を上手になりたい”、NO10 “自分は調理で人を喜ばせたい” の3項目であり、訓練の大切さを高め調理を上手くなって

人を喜ばせたいという思いが強められている。



NO2・4・5・7を除く項目では、選択肢「大いに」と「まあまあ」を加えた割合が9割を超え、炊き出し訓練の大切さ、必要性、人との絆、命を助ける、調理を上手になりたい・人を喜ばせたい、生きる勇気と希望を与える、これらについて生徒は良好な認識を持っている。特に、NO11“生きる勇気と希望を与える”では两年ともに95%を超える結果を示し、訓練の波及的効果が高いことがわかる。

一方で、NO2・4・7の項目を見ると、訓練は大人がすべきこと、家族で行う必要性、中学生が訓練をすることは当たり前、については選択肢「大いに」の割合が4割に達していない。特にNO2“訓練は大人がすべき”では、選択肢「大いに」がH25・20.0、H26・8.1%であり、炊き出し訓練は大人だけでなく中学生等も行うべきことと認識していることがわかる。また、家族で炊き出し訓練することについては、考えや意見を分けており、普段の食事のことを鑑みて判断に迷っているものと考えられる。




成果物

炊き出し調理コンテスト・レシピ集【平成24・25・26年度版】

- ※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
- ※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)
- ※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。



【実践プログラム番号： ⑥】※3

タイトル	生徒会等による防災教育学習成果の外部発信・評価								
実施月日（曜日）	①10月3日(金) ユネスコ・スクール東北大会 ②12月7日(日) 国連防災世界会議ジュニアカンファレンス								
実施場所	①宮城教育大学 ②仙台国際センター大会議室								
担当者または講師	担当者：①宮城教育大学、②仙台市市民局交流政策課								
所要時間または「コマ数×単位時間」	① 12:40～17:00 ② 12:30～16:30								
プログラムのカテゴリ、形式※4	3 講演会・シンポジウム								
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める								
達成目標	防災教育の実践において、生徒が体験的な活動を通じて思考、判断、表現する学習過程で得られる結果をまとめ、外部発信することでプレゼン能力を培うとともに、多様な関係者から外部評価を求める。この評価により、生徒の学習成果が多面的で専門的視点から助言指導を得て、生徒はより防災教育に関する学習の深化、発展に挑むことができる。さらに、この外部評価は教員の指導方法等の工夫・改善に活かすことで、本校の防災教育の拡充と発展に資する。								
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	<p>①ユネスコ・スクール東北大会 この大会は持続発展教育ESDを推進・実践している東北地方のユネスコ・スクール加盟校の教職員や大学教員、教育委員会の職員等が集い、研究協議する大会である。 第1回大会が平成24年度に始まり、本年度で第3回を迎える。本校では第1回大会から毎回、次の内容にて生徒たちが参加している。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>参加・発表の内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1回(H24)</td> <td>1年生約100人が「津波被災農家に弟子入り体験活動」の映像をバックに、「花は咲く」を合唱披露</td> </tr> <tr> <td>第2回(H25)</td> <td>○1年生約100人が群読で「津波被災農家弟子入り体験活動」を発表し、仙台市復興ソングを合唱披露 ○2年生2班の12人が、防災学習の成果をプレゼン</td> </tr> <tr> <td>第3回(H26)</td> <td>○1年生約80人が「津波被災農家に弟子入り体験活動」の映像をバックに、仙台市復興ソングを合唱披露 ○生徒会6名が本校の防災学習の成果等をプレゼン</td> </tr> </tbody> </table> <p>〈平成26年度の合唱とプレゼンの様子〉</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div>		参加・発表の内容	第1回(H24)	1年生約100人が「津波被災農家に弟子入り体験活動」の映像をバックに、「花は咲く」を合唱披露	第2回(H25)	○1年生約100人が群読で「津波被災農家弟子入り体験活動」を発表し、仙台市復興ソングを合唱披露 ○2年生2班の12人が、防災学習の成果をプレゼン	第3回(H26)	○1年生約80人が「津波被災農家に弟子入り体験活動」の映像をバックに、仙台市復興ソングを合唱披露 ○生徒会6名が本校の防災学習の成果等をプレゼン
	参加・発表の内容								
第1回(H24)	1年生約100人が「津波被災農家に弟子入り体験活動」の映像をバックに、「花は咲く」を合唱披露								
第2回(H25)	○1年生約100人が群読で「津波被災農家弟子入り体験活動」を発表し、仙台市復興ソングを合唱披露 ○2年生2班の12人が、防災学習の成果をプレゼン								
第3回(H26)	○1年生約80人が「津波被災農家に弟子入り体験活動」の映像をバックに、仙台市復興ソングを合唱披露 ○生徒会6名が本校の防災学習の成果等をプレゼン								
	<p>②国連防災世界会議ジュニアカンファレンス 仙台市内の中学生50人が「第3回国連防災世界会議」開催前に、本会議の会場にて本番さながらの疑似体験している。体験の目的や内容は次の通りである。</p>								

	<ul style="list-style-type: none"> ・国連防災世界会議の概要や開催目的について理解を深める。 ・同時通訳等、国際会議の疑似体験を通して海外に対する関心を高める。 ・中学生の視点で震災の教訓や国際協力について話し合い発表することを通し、防災意識の向上を図り国際感覚を養う。 <p>本校から生徒会役員1名が参加し、全体会の議長を務めている。</p>
準備、使用したもの	プレゼンに使う機器（C P、プロジェクター、スクリーン）
参加人数	参加者 ①東北大会・約100人、 ②市内の中学生・約50人（本校から生徒会役員1名）
経費の総額・内訳概要	①大会会場までの貸切バス代：大会から支給
成果と課題	生徒は防災教育実践において体験的な活動から学んだ成果をまとめ、得られた課題を追究して創意工夫してプレゼンを行っており、プレゼンスキルと発表・表現能力が培われている。 しかし、達成目標については参観者からの助言指導があまりなかった。そこで、今後はさらに外部発信の機会を設け、生徒が学習の深化や発展、表現・発進力が培われるよう指導配慮していく。
成果物	生徒が作成したプレゼンソフト（創意あふれる防災教育の成果物）



【実践プログラム番号： ⑦】※3

タイトル	3年生による防災教育ポスターセッション
実施月日（曜日）	平成26年11月14日（生徒が主導する地域防災訓練・当日）
実施場所	本校の体育館、武道館、視聴覚室、1階・4教室（計10ヶ所）
担当者または講師	担当者：3年生の発表担当者
所要時間または「コマ数×単位時間」	ポスターセッション [11月14日] 10:30～11:30 （準備期間：10月9日～11月13日 総合的な学習の時間）
プログラムのカテゴリ、形式※4	2、講習会・学習会・ワークショップ 4、総合的な学習の時間 8、その他学校内での時間
活動目的※5	6、防災に関する知識を深める
達成目標	生徒は、防災・減災に関わる10のテーマについて、様々な教材やネット等から情報収集し、必要な情報を探り出しながら、情報を抽出・整理してテーマの課題解決に迫る。この学習過程から生徒の思考力、判断力、表現力を育むとともに、防災・減災に関わる関心や意欲を高め、そして知識を習得することをねらいとする。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、本校・防災主任が生徒会役員に概要説明と指示；9月18日</p> <ul style="list-style-type: none"> ○テーマ学習とその成果発表のポスターセッションについて説明 ○3年生の各テーマ担当を生徒会が割り振り、各テーマを担当する班員とポスターセッションで発表する担当者を決定 ○平成26年度のテーマは、昨年度と同様に次の10のテーマを選定 <ul style="list-style-type: none"> ①仙台市が本校に備える備蓄食と食数 [実際に備蓄食を展示して発表] ②仙台市が本校に備える非常災害時の備品 [防災無線、発電機、仮設トイレなど展示して説明] ③生徒主導の地域防災訓練で行う炊き出し調理 [災害救助用炊飯袋を使用するなど、災害時を想定] ④集団避難経路の決定方法と本校までの避難ルート [一時避難場所からの集団避難と個別避難を想定] ⑤非常持出袋の備えと市販品等の内容物の比較 [市販品等の内容物比較から考察・提言] ⑥アルカス隊(実践プログラム番号④に記載)による震災復興の奉仕活動 [津波被災農家の支援、仙台復興の支援活動など] ⑦AEDの使用方法和演習 [AEDの説明と使用方法を演習] ⑧本校が行っている防災教育の実践活動を報告 [実践活動の実績や成果・効果等の報告] ⑨災害弱者(要援護者)への支援活動の内容と方法 [高齢者や障害者などの災害弱者の支援活動] ⑩生徒が考える避難所グッズと避難所備品等の模擬体験 [生徒が考え作成する避難所グッズ等の紹介] <p>2、生徒会が3年生にテーマ学習とポスターセッションを説明し、テーマ毎の発表担当者を発表；10月9日</p>



3、全3年生がテーマ班毎に情報収集や調査活動を実施：10月9日～



4、テーマ毎に模造紙に学習成果をまとめ、原稿作成と発表練習



5、ポスターセッション；地域防災訓練・当日の10:30～11:30
小学6年生と中学1・2年生、地域防災訓練に参加している地域住民の皆さんに、10テーマの学習成果を発表



小学生の興味関心も高めるため、段ボール製のロボット着ぐるみで寸劇を披露

市販の非常用持ち出し袋をもとに、備えを比較説明



ポスターセッションは10テーマが同時刻に同時に行われ、発表7分、質疑3分の計10分、そして参観者が次のテーマ会場に移動する5分の15分をサイクルに、10:30、10:45、11:00、11:15、11:30に開始される。参観者は興味あるテーマ5つ視聴できることになる。テーマ毎に生徒たちは発表方法を工夫し、演劇仕立てで行ったり、ツナ缶ランプの実演をしたりするなど、参観者が聞き入り、歓声をおこすほど、熱心に聞き入っていた。

準備、使用したもの
・人材・道具、材料等

生徒が作成するポスターセッションに用いる模造紙、本校の避難所用・備蓄物（備品、消耗品）、その他・発表に必要な物品等



参加人数	視聴者 : 小学6年生90人、中学1・2年生 210人、地域等の訓練参加者160人																																																										
経費の総額・内訳概要	模造紙 2,000 円程度																																																										
成果と課題	<p>本プログラムの実践では、ポスターセッションを行った3年生や視聴した1・2年生と地域住民等を対象に、平成25・26年度の訓練実施日にアンケート調査を行った。</p> <table border="1" data-bbox="547 454 1378 801"> <thead> <tr> <th>調査内容</th> <th>対象</th> <th>年度</th> <th>大いに</th> <th>まあまあ</th> <th>あまり</th> <th>ぜんぜん</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="6">テーマ毎の発表では、学ぶことや知ることができた</td> <td rowspan="2">3年生</td> <td>H25</td> <td>66.7</td> <td>29.3</td> <td>4.0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>H26</td> <td>70.1</td> <td>23.7</td> <td>4.1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">参加者</td> <td>H25</td> <td>53.7</td> <td>38.8</td> <td>6.0</td> <td>1.5</td> </tr> <tr> <td>H26</td> <td>54.1</td> <td>40.5</td> <td>2.7</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">1年生</td> <td>H25</td> <td>82.4</td> <td>16.7</td> <td>1.0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>H26</td> <td>75.3</td> <td>21.9</td> <td>1.4</td> <td>1.4</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">2年生</td> <td>H25</td> <td>72.0</td> <td>24.7</td> <td>2.2</td> <td>1.1</td> </tr> <tr> <td>H26</td> <td>78.4</td> <td>18.6</td> <td>2.9</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>小6年生</td> <td>H26</td> <td>66.7</td> <td>25.6</td> <td>6.7</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> <p>選択肢“大いに”と“まあまあ”をあわせた割合は、2カ年ともに5者が9割を超えており、ポスターセッションの成果が良好であったことが分かる。特に選択肢“大いに”では、H26年度が1～3年生が7割を超え、10テーマの学習で理解を増している。しかし、昨年度と比較すると、1年生が若干低くなり、6年生が6割台と低迷しており、低学年にとっては難しい内容であった。また、住民等の参加者についても選択肢“大いに”が5割超えであり、他者に分かりやすさを追求するポスターセッションが今後望まれる。</p> <p>次に、アンケート調査のコメントを、2カ年の調査から対象ごとに抜粋して示す。</p> <p>【3年生】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○防災についてよく学ぶことができました。 ○ポスターセッションで震災の知識が増えた。 ○満足いくポスターセッションや誘導班の仕事ができたのでよかったです。 ○ポスターセッションは劇も入れて行い、楽しくやれた。質疑の時、発表が素晴らしいと言ってくれる地域の方もいたので、とても達成感があふれました。 ○ポスターセッションをして具体的な内容について知ったり、まとめたりできたのも良かったと思います。 ○ポスターセッションでは、地域の方々がためになるアドバイスや感想をおっしゃってくれたため、回を重ねる毎に上手になっていくのを感じることができました。なかなか地域の人々と触れ合う機会がなかったため、このような訓練はこれからは必要になってくると思います。地域の方々が知識を多く持っているのので、それをこれからも受け継いでいきたいです。 ○私は今回、ポスターセッションをするために色々なことを調べて、今まで知らなかった役に立つ情報を知ることができた。 ○ポスターセッションで地域の方から、様々な意見や体験を聞くことができたので、ポスターセッションは必要なことだと思った。 <p>【地域住民】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ポスターセッションも自分たちの言葉でしっかり説明していただけたので良かったです。 ○中学生は色々調べて良く学習しているなあと思いました。とてもためになることもあったので、それぞれの発表が多くの人に伝わるよう、冊子・お便りなどで配布されるといいですね、 ○学校にこんな備蓄品や施設があることを初めて知りました。大震災時に知っていれば、避難に来たかもしれません。今後に備えて学校の存在が心強く感じました。 	調査内容	対象	年度	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん	テーマ毎の発表では、学ぶことや知ることができた	3年生	H25	66.7	29.3	4.0	0	H26	70.1	23.7	4.1	0	参加者	H25	53.7	38.8	6.0	1.5	H26	54.1	40.5	2.7	0	1年生	H25	82.4	16.7	1.0	0	H26	75.3	21.9	1.4	1.4	2年生	H25	72.0	24.7	2.2	1.1	H26	78.4	18.6	2.9	0	小6年生	H26	66.7	25.6	6.7	0
調査内容	対象	年度	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん																																																					
テーマ毎の発表では、学ぶことや知ることができた	3年生	H25	66.7	29.3	4.0	0																																																					
		H26	70.1	23.7	4.1	0																																																					
	参加者	H25	53.7	38.8	6.0	1.5																																																					
		H26	54.1	40.5	2.7	0																																																					
	1年生	H25	82.4	16.7	1.0	0																																																					
		H26	75.3	21.9	1.4	1.4																																																					
2年生	H25	72.0	24.7	2.2	1.1																																																						
	H26	78.4	18.6	2.9	0																																																						
小6年生	H26	66.7	25.6	6.7	0																																																						

○中学生の発表は、よく調べてあって、とても参考になりました。
○三年生の発表がしっかりしてて、素晴らしかった。

■各班にハンドマイクが必要。高齢者が多いので、ゆっくり、はっきりと分かるように説明することが大事。

【1・2年生】

○防災への意識が高まった。震災時に自分のすべきこと、できることが分かった。今日学んだことを、学校だけではなく、家庭や地域で生かしていきたいと思う。

○ポスターセッションで学んだことを、親などに伝えていき、もし災害が起こったら、今日学んだことを生かしていきたいと思います。

○ポスターセッションで災害のための備えや災害が起こったときの対応などを学べたのでよかったです。

○ポスターセッションがとてもためになった。AED や防災バックの中など、これから地震とかあったら困らないように備えておきたい。

○昨年より自分のためにもなったし、友達と4テーマを回って、これからどう活動していくか考えることができた。

○真剣に話を聞くことができた。ポスターセッションなどの体験にも意欲的に取り組めた。

○アルカス隊の活動内容、ユネスコスクールについての情報、非常持ち出し袋に入れておくとよい物など、災害時に必要な物や心構えが知れてよかった。

○ポスターセッションが分かりやすく勉強になった。

○今回の地域防災訓練で、三年生が調べたポスターセッションはすごいと思った。

○先輩達のポスターセッションはとても興味深い内容で、ためになりました。

○3年生のポスターセッションでは、学ぶことが沢山ありました。身近なもので防災グッズを作ったり、学校の中の非常用グッズの種類・量や入っている場所を初めて知りました。これは今後の生活に活かせることだと思います。

○3年生の先輩方のポスターセッションでは、地震が来た際の備えやAEDの使い方など、災害時に役立つようなことが沢山の学べた。

【小学6年生】

○防災について知ることができてよかった。この知ったことを無駄にせず、もし起きたら実行できるよう覚えておきたいです。中学生の発表はとても分かりやすかったです。

○実際に震災にあったときの自分の命の守り方や怪我をしている人などの困っている人の助け方を学ぶことができたのでよかったです。

○すごくためになったし、分かりやすかったので、これからも広めていきたいと思っています。

○ポスターセッションでは例を出して劇をしていて分かりやすくよかったです。地域の方々と一緒にできてよかったです。

○ポスターセッションが面白く、それに加えて分かりやすく、見ていてとても楽しかったです。



○ポスターセッションや炊き出しなどで、地域の人とも交流でき、震災の時にも必要とされる交流を深めることができるので、またこのようなことをすべきだと思います。

以上のように、沢山のコメントを地域住民や小学生、中学生からいただいたが、その一部だけを紹介している。コメントからは3年生がポスターセッションを行ったことで、大なる成果を得られたことが分かる。しかし、高齢者に対する配慮が欠けており、声の大きさや見やすい文字の大きさなど、今後の課題と改善点も明らかになった。

成果物

ポスターセッションで創意工夫して作成した発表用模造紙

【実践プログラム番号： ⑧】※3

タイトル	防災教育による学校間交流
実施月日（曜日）	① 8月 4日（月） 神戸市立住吉中学校 ② 8月 18日（月） 桃山学院中学校（大阪市）
実施場所	① 第2音楽室 ② 校長室
担当者または講師	担当者：① 神戸市立住吉中学校の生徒会4人・本校の生徒会4人 ② 桃山学院中学校の教員2人・本校の教員2人
所要時間または「コマ数×単位時間」	① 14:30～17:00 ② 13:30～15:30
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 イベント・行事 4 総合的な学習の時間
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める
達成目標	① 大震災からの復興や、災害時における学校と中学生の役割について意見交換し、防災・減災の備えや取組と復興の在り方を構想する。 ② 文通などを通じて生徒同士の心の交流や学校間の関係を深め、共に成長を図る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>① 神戸市立住吉中学校との交流 [防災教育の取組事例を紹介] [災害時の中学生の役割を意見交換]</p>   <p>教訓の継承、震災を語り継ぐ、自助と共助、防災・減災の備え、など中学生ができることについて様々な意見交換を行った。</p> <p>② 桃山学院中学校との交流 生徒間の文通などを通じて「心の交流を深めるプロジェクト」を開始するため、事前の協議・検討を行っている。</p>
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	パソコン、プロジェクター、スクリーン、資料
参加人数	① 両校の生徒会4人ずつ、教員6人の計14人 ② 教員4人
経費の総額・内訳概要	①と②ともに交流・来校者が旅費を支出
成果と課題	① 生徒会の生徒たちは、阪神淡路大震災と東日本大震災の震災被害状況や復興の歩み、防災・減災の取組など、様々な意見交換を行うことができた。神戸の生徒会から教訓の継承や震災を語り継ぐことの重要性を学んだり、継承の難しさと風化と忘却の課題について指摘し合ったりするなど、中学生に何ができるか有意義な話し合いが行われ、相互の学校でこれからの取組を考えるきっかけともなった。 ② 文通や生徒の被災地視察など、実現までの課題とその成果等を検討し合うことができた。
成果物	小中学生が創る・仙台復興を願う千羽鶴



【実践プログラム番号： ⑩】※3

タイトル	中学生が主導する地域防災訓練と防災シンポジウム								
実施月日（曜日）	平成26年11月14日(金) [昨年度:平成25年11月15日(金)]								
実施場所	本校の校舎、体育館、武道館								
担当者または講師	担当者：中学生、学校支援組織、大学、市教委など 講師：保田 真理 氏（東北大学災害科学国際研究所）								
所要時間または「コマ数×単位時間」	8：15～17：00								
プログラムのカテゴリ、形式※4	2 講習会・学習会・ワークショップ 3 講演会・シンポジウム 16 避難・防災訓練								
活動目的※5	3 災害に強い地域をつくる								
達成目標	<p>少子高齢化と核家族化が進み、生徒を含む住民間の絆が懸念される地域において、次のねらいに基づいて「中学生が主導する地域防災訓練」などの防災教育を推進し、地域防災力を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 防災意識を高め、災害時の自助・共助の在り方を習得 ○ 地域における災害対策や対応機能の向上 ○ 防災・減災の生活行動習慣の獲得 ○ 災害時の的確かつ臨機応変な判断能力の育成 <p>本教育実践では、中学生が核となる防災教育活動に取り組み、地域住民を巻き込む活動に発展させることで、学校・生徒と地域住民間の協働体制に進化させ、継続的・創造的に実践を展開する。</p> <p>このことにより、学校・生徒や保護者を含む地域住民の「関わり」と「つながり」が拡充・継続し、持続可能な地域社会づくりと地域の活性化を推進する。</p> <p>また、今年度は新たに避難者役として小学6年生を加え、訓練の難易度を高める。</p>								
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>1、中学生が主導する地域防災訓練の概要</p> <p>本校3年生が、①避難所の開設と運営、②炊き出し調理と配給、③集団避難の誘導、④救急・救護、⑤災害状況の情報収集・報道、⑥災害対策本部の各班に分かれ、学校・地域支援組織の支援を受けて地域防災訓練を担い、実施する。その際、小学6・中学1・2年生は避難者役となり、3年生の指導を受けて訓練に参加して学ぶことにする。</p> <p>生徒会役員は、本訓練の企画、計画を立案し、3年生に対して訓練の概要説明や①～⑤の各班に所属する3年生の選出、そして訓練当日には⑥の対策本部に属して、訓練すべての運営・進行と指揮を司る。</p> <p>教職員は、3年生が企画、計画、準備、実施する各過程において助言に徹し、指示や指導をひかえ、生徒自らが考え、判断し、行動・表現ができるよう促す役割を果たす。</p> <p>（1）学校・地域支援組織“チームMY・SP”との協働・連携</p> <p>中学生主導の地域防災訓練では、本校の既存組織である“南吉成中学校区・青少年健全育成協議会”を拡大させて発足する「南吉成 学校・地域支援組織チームMY・SP」に属する地域組織が各班を分担して助言と活動補佐を行っていただく。以下の表にその分担を示す。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>生徒の班活動</th> <th>学校支援組織の担当</th> <th>その他、協力機関等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>避難所設営・運営班</td> <td>健全育成委員、体育振興会、老人会・クラブ</td> <td>○南吉成地区社会福祉協議会</td> </tr> </tbody> </table>		生徒の班活動	学校支援組織の担当	その他、協力機関等	1	避難所設営・運営班	健全育成委員、体育振興会、老人会・クラブ	○南吉成地区社会福祉協議会
	生徒の班活動	学校支援組織の担当	その他、協力機関等						
1	避難所設営・運営班	健全育成委員、体育振興会、老人会・クラブ	○南吉成地区社会福祉協議会						



2	炊き出し調理班	父母教師会・役員、婦人会	○防犯協会、○交通安全協会、○消防団、○仙台市教委 ○宮城教育大学 ○仙台北警察署 ○南吉成交番所 ○吉成コミュニティーセンター、 など
3	集団避難・誘導班	消防団、交通指導隊、交番所、地区委員	
4	救急・救護班	民生児童委員会、婦人防火クラブ	
5	災害状況・情報収集班	健全育成委員	
6	災害対策本部	町内会長(7町内会)	

生徒の班ごとの訓練活動については、訓練実施前に生徒と本組織が集まり、班毎に生徒が活動内容と実施計画等について説明を行い、各組織の大人の方々と質疑して訓練実施に備える。

(2) 訓練・講演会の日程

生徒会・役員は、午前中に災害対策本部に属し、訓練すべての指揮と連絡調整を行い、ポスターセッションの進行と運営、午後にはシンポジウムの司会・進行など運営を担う。

時刻	訓練概要	3年生・生徒会の活動	小6と中1・2年生、地域・参加者の動向
8:15		○3年生・登校、係ごと準備	
8:30	地震発生	(班毎に活動)	○各地区の一時避難所・集合
9:00	集団避難・移動開始	(避難所・受付、運営)	○一時避難所から集団避難・移動(受付) 【学校近隣の生徒は学校に登校】
↓	(避難所・受付)		
10:00	学校に避難・受付完了 本日の日程・活動説明	○生徒会が説明	○学校到着・受付完了 ○日程説明で、本日の活動の確認
10:30	ポスターセッション	○3年生等が ポスターセッション	○ポスターセッションを聞き、 ワークシートに記入
↓	↓(15分間隔で班・移動)		
11:30	(終了)	(班毎の活動終了)	《10テーマ中、4つを視聴》
11:45	炊き出し試食	○炊き出しの配給(調理班)	○炊き出しの試食
12:45	(後片付け)	(後片付け)	(後片付け)
13:00	開会	①開会宣言 生徒会副会長 ②挨拶・講師紹介 校長	
	講演 (14:30~14:45 休憩)	③講演:『地震・津波、頻発する自然災害-減災する意識で守る命』 講師:東北大学災害科学国際研究所助手 保田 真理 氏	
(14:45~)	活動報告・総括等	④活動報告:各班が活動成果や課題等を発表 ⑤訓練の総括講評:仙台市教育委員会、宮城教育大学	
		⑥御礼と閉会挨拶 生徒会長	
16:30	閉会・終了	⑦閉会宣言 生徒会副会長	

(3) ポスターセッションについて

【概要については“実践プログラム番号⑦”、本報告書の P19 参照】

3年生が以下の表に示す10のテーマを分担し、防災・減災に関すること・もの・考え等について模造紙にまとめ、テーマ毎に10の会場に分かれて集まる方々の前で説明・報告し、質疑を交わす。視聴者は、説明・報告7分、質疑3分程度、移動5分の計15分を一つのテーマにかけ、10:30、10:45、11:00、11:15の開始時刻として4つのテーマに参加する。小学6年生と中学1・2年生等は、視聴結果をワークシートに

記録・感想・評価を行う。

位置	ポスターセッション・テーマ	
体育館	①	仙台市が本校に備える備蓄食と食数
	②	本校の炊き出し調理の概要
	③	避難経路の決定方法と本校までの避難ルート
武道館	④	仙台市が本校に備える非常災害時の備品
	⑤	本校が設置する避難所の模擬体験
視聴覚室	⑥	非常持出袋の備えと市販品等の内容物の比較
1年教室	1組	⑦アルカス隊による震災復興の奉仕活動報告
	2組	⑧AEDの使用方法と本校生徒AED研修会の報告
	3組	⑨本校の防災教育実践の情報発信(生徒会・役員)
	学習室	⑩災害弱者(要援護者)への支援活動の内容と方法

(4) 集団避難訓練について

一時避難所は4ヶ所にし、各50~60人程度の児童・生徒と地域住民十数名が避難・集合している。ただし、学校近隣の生徒については、直接に学校に避難・登校する。

3年生の集団避難・誘導の担当生徒は、小学6年生と中学1・2年生、地域住民を以下の表に示す一時避難所から、中学校まで集団避難誘導を務める。

	登校形態	地区	一時避難所
1	学校へ登校	以下の地区以外(吉成2・3、南吉成3~6丁目等)	
2	一時避難所に集合の後、登校	南吉成1・2・7丁目	南吉成2丁目公園
3		中山吉成1・2・3丁目	中山吉成集会所
4		中山台2丁目、中山台西、芋沢	中山台2丁目公園
5		中山台1・3・4	中山台1丁目公園

(5) 各班の活動の様子

①避難所設営・運営班・・・避難所を設営して避難者に対応。受付で避難者の名前等を記録

小学生の受付



住民の受付



避難完了時



②炊き出し調理班・・・非常災害用炊飯袋でご飯を炊き、本校特製の**カレー丼650食分**(去年は550食)を調理・提供
PTA役員が温かい豚汁を調理・提供



③集団避難・誘導班・・・4ヶ所に設けた一時避難所に集合し、生徒が誘導して本校まで集団避難



④救急・救護班・・・担当生徒が避難者に聞き取りによる健康調査や血圧測定など実施



⑤災害状況・情報収集班・・・生徒が支援組織の方と一緒に地域を巡回して危険箇所等を調べ、さらには各戸を訪れ、本校で午後開催するシンポジウムのチラシを配布



⑥災害対策本部・・・生徒会役員がトランシーバを携帯して各班の進捗状況を把握し、本部の7町内会長に情報を集約。この情報をもとに、計画通りに訓練等が進行・実施しているかを確認し、遅れ等の問題が生じている場合は、生徒会が主体的に改善提案して迅速に解決を図っている。



2、訓練準備・実施計画

チームMY・SPと生徒会、3年生は以下の表にて地域防災訓練の準備を計画的に行い、訓練を実施している。

月 日	実施内容
5月29日	チームMY・SPの総会(今年度の活動計画と地域防災訓練の概要説明)
8月26日	全校生徒に地域防災訓練の実施説明
9月18日	生徒会が先生と地域防災訓練の概要を説明・質疑
19日 ～	生徒会役員がポスターセッションのテーマ毎の担当者と発表者、そして訓練で担当する班員を選出・決定
9月30日	チームMY・SP総会 生徒会・役員が防災訓練概要と協力依頼の説明等



10月9日～	生徒会役員が、3年生に地域防災訓練の内容等を説明し、訓練の班編成とその班員、ポスターセッションのテーマ学習担当者と発表者を決めて報告 テーマごとの準備活動(模造紙・作成、発表原稿など)
21日	○生徒会が防災訓練の班の活動内容を説明、 ○班毎に計画・内容等の検討とその準備活動
11月11日～	○班ごとの活動計画・内容の確認 ○班毎で準備活動を継続
11月12日 (6校時)	各班を担当する生徒たちが、班毎に学校支援組織の担当者に班活動の計画・内容と訓練活動を説明して検討・協議
11月14日	地域防災訓練・当日
14日～	○アンケート調査等の実施 ○成果や課題の分析とまとめ
2月中旬	報告書等の成果物の作成・公表

準備活動の様子《写真》

○9月18日
生徒会役員に訓練概要を説明



○9月19日
テーマごとの準備活動



○9月30日
生徒会が班活動の説明



○10月9日～
班毎の検討会・準備活動



○11月12日 各班生徒たちが学校・地域支援組織チームMY・SPの担当者に活動内容を説明して最終検討・協議



準備、使用したもの・人材・道具、材料等

○人材 チームMY・SP (学校・地域支援組織)、消防団、仙台北警察署、宮城教育大学、老人会、仙台市教育委員会等
○道具 非常災害備蓄食・備品等、トランシーバー、救急用品、プロジェクターなど

参加人数

小学6年生90人、中学生290人、学校・地域支援組織と地域住民等214人、教職員36人

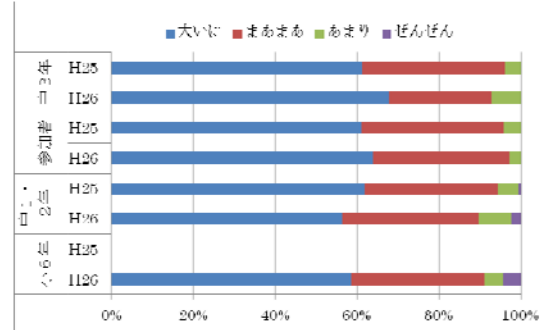


<p>経費の総額・内訳概要</p>	<p>約650人分の炊き出し食材費：総額138,896円 カレーライス 79,690円、豚汁 48,918円</p>
<p>成果と課題</p>	<p>4、アンケート調査の結果・分析について 平成26年11月14日(金)に実施した「中学生が主導する地域防災訓練」のアンケート調査を、以下のとおり実施し、その調査項目の内容と集計結果を表に示す。</p> <p>①調査日 小・中学生：11月14日(金)、 地域住民等の参加者：11月14日(金)</p> <p>②調査方法 4件尺度法による質問紙調査で16の調査項目</p> <p>③調査対象 平成25年度 中学1～3年生と参加者 平成26年度 小学6年生・小学1～3年生と参加者</p> <p>《分析結果について：選択肢の割合による比較》 選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合は、2カ年ともにほぼ9割以上を示しており、児童・生徒と住民が中学生が主導する地域防災訓練を評価していることがわかる。</p> <p>特に16調査項目の内、次に示す6項目において特徴的な分析結果が得られたので、グラフを示して分析結果を示してみる。</p> <p>N02「地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある」 訓練を実行した3年生は選択肢“大いに”が2ヶ年ともに8割程度であり、参加者についてもH26年に割合が上がっており、学校と地域が一緒に防災訓練を行う必要性を高めている。</p> <p>しかし、避難者役の生徒は“大いに”が7.5%低下し、訓練の目的等について周知が課題である。</p> <p>N03「中学生が主導する地域防災訓練により、中学生は地域防災に貢献できる」 選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合は児童・生徒と参加者のいずれにおいても、2カ年ともに95%を超えている。しかし、“大いに”では、3年生が前年より7.9%低下し、今年に小6年生を加えてより参加人数が増えたことによる影響が生じたものと考えられる。</p> <p>N04「本日の訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる」 選択肢“大いに”について、参加者は昨年より11.7%高まり、1・2年生は11.4%低下している。1・2年生はN02で7.5N03で6.5%とどの項目でも昨年より低く、避難者</p>

役として参加していることで、防災訓練に対する積極的な学びに欠けていることが考えられる。このため、次回の訓練前に訓練目的やねらい、訓練による効果や成果について学ぶ時間が必要である。

N06 「中学生が主導する地域防災訓練は、毎年、実施する必要がある」

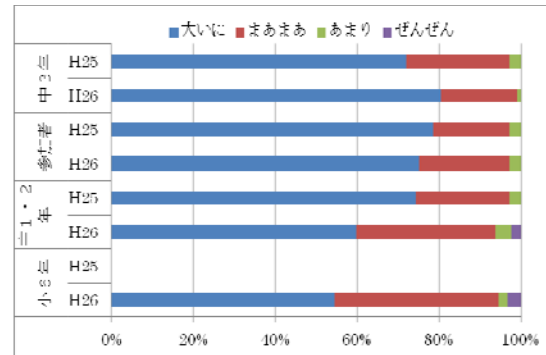
選択肢“大いに”では、児童・生徒や参加者ともに6割程度を占め、3年生と参加者については、昨年より若干、高くなっている。毎年の訓練実施が、実施役の3年生をはじめ、参加者の訓練の必要意義を年々より高めていくことが期待できると考える。



N08 「地域や学校と一緒に様々な活動や取組を行うことは、地域活性化につながる」

選択肢“大いに”の割合では、3年生が昨年より8.6%高くなったものの、参加者では5.6%、1・2年生では15.0%と昨年より低下した。

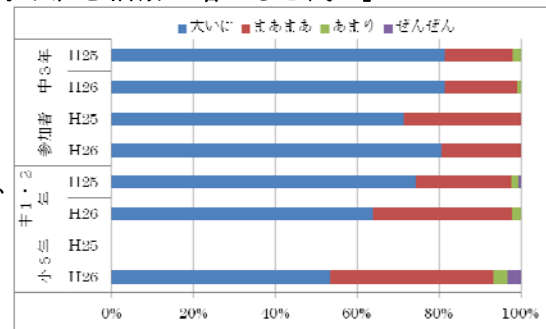
1・2年生は特に本訓練を通じて、地域と学校と一緒に様々な活動・取組を行うことが地域活性化に繋がることまでを思い



描くことは難しいものとも考えられる。今後、地域活性化について考えさせるとともに、地域が持つ課題を見つけ、その解決を考えさせる学習を通じて活力ある地域作りにつなげていきたい。

N011 「地域と学校と一緒に取り組む活動が増えると良い」

選択肢“大いに”の割合では、3年生が2カ年ともに8割を超えており、地域と一緒に取り組む活動を良好に捉えている。参加した住民についても、昨年より7.0%増え、学校と一緒に活動することを好意的に捉えている。



しかし、1・2年生は、昨年より11.0%低下していることから、学校と地域と一緒に取り組む活動が増えるとうなるかについて考えさせる機会を設ける必要がある。その際には、活動が増えることによるメリットにより、学校・地域・家庭の関わり・つながりが深まり、延いては安全・安心な地域作りと地域防災力の向上にも資することも考えさせたい。

《分析結果について：相関分析》

次に、3年生だけについて、調査項目間の相関分析を行い、その結果を以下に示す。平成25・26年度に強い相関を示した項目間は、次のとおりである。

平成25年度

①相関係数 0.78

N011 「地域と学校と一緒に取り組む活動が増えると良い」

N02 「地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防

「災害訓練を行う必要がある」

②相関係数 0.70

NO11「地域と学校が一緒に取り組む活動が増えると良い」

NO10「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる」

これらの相関関係からは、地域防災訓練の必要性和防災教育の重要性から、地域と学校が一緒に取り組む活動を増やすことが、3年生は強く認識していることが分かる。

平成26年度

①相関係数 0.80

NO7「学校や生徒が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる」

NO10「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる」

②相関係数 0.76

NO1「本日の訓練に限らず、地域で行う防災訓練は必要である」

NO2「地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある」

③相関係数 0.75

NO2「地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある」

NO5「実際に大震災が起きた場合、地域防災訓練は役立つ」

④相関係数 0.73

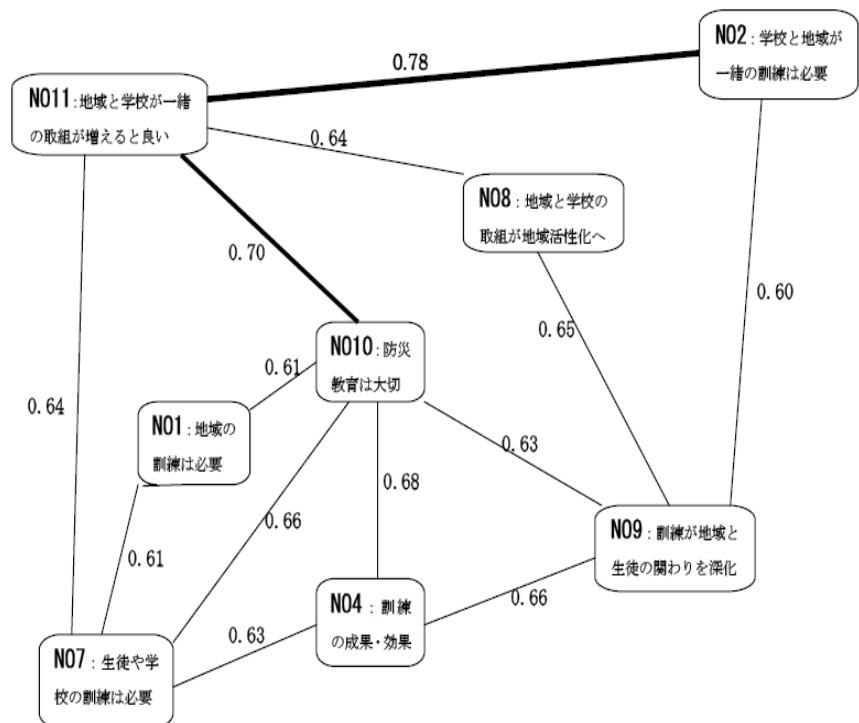
NO9「本日の訓練は、地域と生徒の関わりを深める」

NO11「地域と学校が一緒に取り組む活動が増えると良い」

以上から、「学校や生徒が訓練を実施・協力する必要性は防災教育で大切であり、地域だけでなく学校と一緒に訓練を行うことがより求められ、大震災が起きた場合にその訓練が役に立つ。そして、学校と地域と一緒に活動することにより、地域と生徒の関わりも深める。」平成26年度の訓練を実行した3年生は、このような認識を抱いていることがわかる。

《分析結果について：相関図の比較分析》

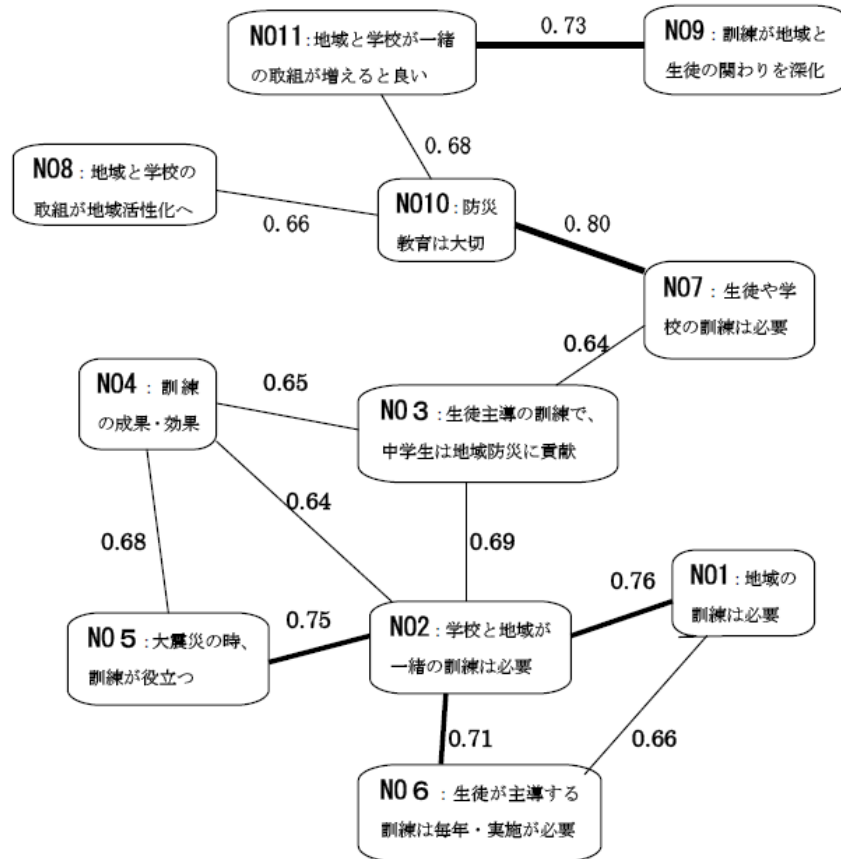
平成25年度



上記の相関図からは、NO10「防災教育の大切さ」を核としてNO1、NO4、

N07、N09、N011 と相関が認められている。このことは、防災教育を通じて、防災訓練の必要性とその効果・成果を高められ、地域と生徒の関わり・つながりが深まり、地域と学校の連携が図られる、そして、学校と地域の取組が増えることで地域の活性化にもつながる、ことを潜在的に認識・意識化しているものと考えられる。

平成26年度



上記の相関図からは、N02 “学校と地域が一緒に訓練が必要” を核として N01、N03、N04、N05、N06 と相関が認められている。このことは、学校と地域が一緒に地域防災訓練を行う必要性は、中学生が主導の訓練が地域防災に貢献し、それを毎年実施することで震災時に役立つ訓練となり、訓練の成果・効果が高まるものと、訓練の実行を通じて3年生は潜在的に認識・意識化しているものと考えられる。そして、もう一つの核として N010 “防災教育は大切” が、N07、N08、N011 と相関があることから、防災教育の重要性として、地域防災訓練は生徒と学校にとって必要にことであり、地域と一緒に取り組むことで地域の活性化にも繋がるものとの捉えを抱えていることが分かる。

2カ年の相関図からは地域防災訓練の実行役の3年生が訓練から捉える認識の違いが見えてくる。今後は、さらに明確な実践目標に基づいて目指すべき生徒に形成する認知を考えていく必要がある。

また、避難者役の小6年生、中1・2年生に対しても、訓練で培う目的についても明らかにし、2カ年実施してきた中学生が主導する地域防災訓練を見直していく必要があると考える。

次年度の実施に向けて、データ分析結果をもとに実行役と避難者役への指導内容と方法について改良・改善を図っていきたい。

成果物

平成25年度の報告書「中学生が主導する地域防災訓練」
防災教育テーマ別のポスターセッション用掲示物
集団避難経路図などの防災関係の学習成果物 など



4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案と調整で苦勞した点 工夫した点</p>	<p>(1) 学校と生徒が有する防災対応・対策の機能やスキル能力の現状と可能性の追究：プラン立案において、現状分析と可能性の追求に基づき、構想</p> <p>(2) 地域の特性や実態を把握し、それらを生かした創意・工夫ある実践可能なプランの策定</p> <p>① 地域特性として、学区は都市部近郊の丘陵地帯に位置し、二十数年前に山林を開拓した新興住宅地。このため、地域の伝統文化がなく、住民間の関係性も強くないベッドタウン化。少子高齢化と核家族化が進む。</p> <p>② この現況と課題を克服、または逆に生かす防災教育の取組方法を模索。</p> <p>(3) 地域特性を考慮し、構想する防災教育実践プランの条件設定を考察・設計：○プラン内容によって、条件適合する地域の多彩な人的教育資源の活用方法。○平日・休日による不在年齢層の相違条件に基づく防災訓練。○地理的・地形的条件(都市部近隣・新たに開拓された団地・起伏ある丘陵地帯等)設計による防災訓練の構築。など</p> <p>(4) 組織的、系統的、計画的、継続的な防災教育を実践し、プランの汎用性、継続性、発展性、有効性等を追究・検証できるプランとカリキュラムの構築を目指す</p> <p>(5) 新たな防災教育を構想・実践するため、教職員や保護者の意識と理解、協力と連携が不可欠：プラン構想段階から周知と協議・検討の積み重ね。</p>
<p>準備活動で苦勞した点 工夫した点</p>	<p>(6) 防災教育では地域防災力の向上を図って、その成果や効果を追求するために必要なファクターとして、可能な限り、地域の組織・機関・団体を巻き込む必要がある。：より多くの地域の組織等と連携・協力を得るためには、交渉や説明などに、時間や調整に手間取る。</p> <p>(7) 学校や地域が求める防災を推進するためには、地域特性が抱える課題や問題を解決する内容と方法・手段を、準備活動をしながら模索し、プランの逐次改善を図る必要がある。：例えば、住民の関係性の希薄化により、防災の実践化に支障があれば、学校と中学生が住民と戦略的に関わる(奉仕活動)ことで、住民間の繋がりを促し、段階的に実践を展開・拡充する。</p> <p>(8) より成果や効果を高めるため、教育実践に協力・支援する地域人材を掘り起こす。：地域の人的教育資源の情報収集を、住民間のネットを活用。</p> <p>(9) 多様な年代層の住民と関わることで、生徒の社会性を培う。：生徒が様々な年代の住民と防災訓練を行うことで、年代を超えた議論や理解が得られ、異年齢交流を図ることができる。</p> <p>(10) 学校や地域が、防災教育を推進するために必要な予算措置がない。：学校が予算獲得するために防災教育チャレンジプラン等に応募して予算確保。</p>
<p>実践に当たって苦勞した点 工夫した点</p>	<p>(11) 新たな教育実践を始めるに当たり、保護者に理解や協力を得るため、事前アンケート調査を実施し、阻害要因の解消を図る。</p> <p>① 津波被災地の農家を支援する奉仕活動では、保護者が津波の再襲来を心配して活動に反対したり、真夏日の除草作業で熱中症を懸念したりなど、事前調査から課題把握できた。そこで、再襲来時の避難ルートや被災地周辺の病院とその移動ルート・時間などを、現地の下見と病院への依頼等により、対応策を周知して課題を払拭している。</p> <p>② 中学生が主導する地域防災訓練の実践では、中学生には難しい取組、学力向上に時間を使うべき、これまで通りでよい、などの事前調査から意見を集約している。これらの意見についても、保護者に理解をいただくためにPTA集会等で説明と協力を仰いだ。</p> <p>(12) 学校支援組織には老人会など、高齢の方々も支援していただいております、防災教育の実践について説明や依頼などしている。しかしご理解ご支援をいただくまで、分かりやすく丁寧な説明が幾度となく必要になった。</p> <p>(13) 昨年は、地域防災訓練の当日に、炊き出し食材が時間になっても届かず、依頼業者に連絡をすると正式な依頼がなかったとの返答。しかし事前に何度も見積依頼をやり直していた経緯から、時間は遅れたものの食材を搬入ができた。その間、生徒たちは臨機応変に対処して事態回避。</p>

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	宮城教育大学・教育復興支援センター	中学生が主導する地域防災訓練の視察と指導・助言
	仙台市教育委員会・教育指導課	中学生が主導する地域防災訓練の視察と指導・助言
	東北大学災害科学国際研究所	地域防災訓練後に開催した防災教育講演会・講師
	神戸市立住吉中学校	生徒会が来校し、防災教育に関する実践交流
保護者・ PTAの組織	本校の父母教師会・本部役員	生徒とともに津波被災農家の奉仕活動、地域防災訓練の支援
	健全育成委員 各地区委員	
	本校の保護者	生徒とともに津波被災農家の奉仕活動、地域防災訓練の支援と参加
地域組織	本校の学校・地域支援組織 「チームMY・SP」	中学生が主導する地域防災訓練の視察と支援・協力と助言
	吉成防犯協会	
	交通安全協会	
	吉成交通指導隊	
	南吉成学区民・体育振興会	
	吉成地区老人クラブ連合会	
	吉成老人会、南吉成老人クラブ、五葉会、さつき会、中山吉成老人クラブ	
	民生児童委員	
町内会(南吉成、中山吉成、吉成、西吉成、権現森山町、中山台西町)		
国・地方公共団体・ 公共施設	吉成市民センター	中学生が主導する地域防災訓練の視察と支援と指導
	仙台北警察署	
	南吉成交番所	
	仙台宮城消防団	
	南吉成地区社会福祉協議会	仙台復興シンボルイベント奉仕活動の協力
	南吉成コミュニティセンター	
	仙台北地区防犯協会連合会	
	仙台市農業園芸センター	
企業・ 産業関連の組合等	宮城生協・国見ヶ丘店	中学生が主導する地域防災訓練の支援
	仙台一番町四丁目商店街振興組合	仙台復興シンボルイベント奉仕活動の協力
	(株)荒浜アグリパートナーズ	津波被災農家の奉仕活動・支援
	社団法人 共同通信社	本校の防災教育と中学生が主導する地域防災訓練の視察
ボランティア団体・ NPO法人・NGO 等	中山吉成婦人防火クラブ	地域防災訓練の支援
	公益財団法人 J K A	津波被災農家支援等で教育助成
	仙台いきいき青葉区推進協議会	仙台復興シンボルイベント奉仕活動の協力
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	なし	



6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として 得たこと</p>	<p>本プランは地域組織を活用して学校・地域支援組織「チームMY・SP」を発足させ、その支援を受けて中学生が主導する地域防災訓練を行うことに特徴がある。その成果としては、</p> <p>①中学生が主導することにより、地域防災を担う人材が育成され、将来的には地域に根付く防災・減災の文化化が図れる。</p> <p>②地域組織による学校支援は、防災教育を切り口として地域を巻き込む教育実践となり、学校・地域・家庭が連携した取組に進化することができる。このことにより、着実に地域防災力の向上が図れる。</p> <p>③主に担当する管理職や教員が転勤しても、中学生が主導し、学校・地域支援組織が関わる地域防災訓練の体制は、継続して実践され続ける可能性が高い。</p> <p>④本プランは多様な地域特性に応じ、防災教育実践をできる汎用性がある。</p> <p>⑤中学生と住民はともに、防災における中学生の地域貢献度を高く認知し、ともに防災教育を推進することで地域活性化につながるものと期待できる。</p> <p>さらに、防災教育に係る実践プログラムからは、次の成果を得ている。</p> <p>⑥津波被災農家の弟子入り体験学習では、被災地復興に自分の力を活かしたい、役立ちたい、何ができるか考えたいとほぼ全ての生徒が思いを抱き、助け合い・支え合いの大切さ、苦難を乗り越える努力の必要性など、体験から奉仕の心とその意欲、さらには生き方をも学び取ることができる。</p> <p>⑦炊き出し調理コンテストでは、生徒の防災スキルを高めるだけでなく、ほぼ全ての生徒が食べる人々に生きる勇気と希望を与えられると理解している。</p> <p>⑧被災地視察では、同じ市内でも本校生徒の住む地域との被害の違い、仮設住まい等の現況を知り、被災者の心情を理解し、教訓の風化を防ぎ、継承する責務を改めて痛感している。</p> <p>⑨生徒たちは体験的な防災教育実践において思考、判断、表現の学習プロセスを繰り返し、学び取った防災教育の結果や成果を外部発信することにより、他校や他地域等で活かせる成果物を提供する。（ユネスコスクール活動）</p> <p>⑩“仙台の復興は自分たちの手で”を合言葉に、生徒たちは奉仕活動を通じて仙台復興のPRに尽力し、積極的に地域貢献を果たしている。</p>
<p>全体の反省・ 感想・課題</p>	<p>本プランは中学生が防災教育を学ぶことだけに止まらず、地域住民を取り込む形に展開しつつあり、中学生が地域防災の要としてその役割が大いに期待できるものに発展してきている。このことは、中学生が地域への奉仕活動や地域に役立つ防災活動を行うことで、地域住民と一緒に防災教育を学ぶことにその成果や効果が起因しているものと考えられる。さらには、中学生と地域住民の取組が相乗効果を生み、地域防災力の向上につながるものと考えられる。そこで、より発展的な実践プランの改善・創出も、今後検討していく必要があり、どのような実践プログラムに改良すべきかが問われていると考える。</p> <p>また、もう一つの課題は、被災農家の体験学習に保護者の参加を募り、中学生と一緒に奉仕活動や農家との交流を図ろうとしている。しかし、参加する保護者は十数名程度であり、貸切バスに空席がある。保護者の参加者数を増やすためだけでなく、より多くの保護者が中学生と一緒に体験を積み、被災者と交流することで保護者とともに中学生もさらなる変容が期待できるものと考えている。そこで、来年度には実施前に調査し、原因を抽出してその解決を図り、多くの保護者が参加して生徒たちと一緒に体験学習に望みたいと考えている。</p>
<p>今後の 継続予定</p>	<p>(1)中学生が主導する地域防災訓練：昨年度は全校生徒 320 名、教職員 26 名、支援組織と地域住民 209 人の計 555 人が参加している。今年度には隣接する小学 6 年生 90 名を加え、全体で 630 規模の参加となった。今年度のアンケートの分析から課題を抽出し、その解決策を追究する。</p> <p>(2)津波被災農家に弟子入り体験学習：H24 に 1 年生、H25 に 1・2 年生が参加しており、H26 には全校生徒 290 名が参加して実施している。課題である保護者の参加を約 100 名にし、事前調査で参加出来ない理由の払拭を図る。</p> <p>(3)本校の防災教育の外部発信：本校の実践成果を生徒と教員が外部発信し、他校等でも実践できる報告成果物を説明・提供する。</p> <p>(4)他県の中学校との交流学习：三重大付属中、神戸市立住吉中と交流推進</p>

7. 自由記述欄 ※6

※6 自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守をお願いします。

1. 本プランの汎用性と継続性の追究

「中学生が主導する地域防災訓練」は、本校校長がこれまで赴任した3つの中学校で実施している。この訓練は、中学生が次に示す6つの班に分かれ、地域の既存組織を活かして学校・地域支援組織を発足させ、中学生の各班をその支援組織が分担して補佐・支援して行うものであり、中学生が主体となって実施訓練する。

【生徒の活動班】①避難所設営・運営班、②集団避難・誘導班、③炊き出し調理班、
④保健・救急救護班、⑤災害状況・情報収集班、⑥災害対策本部

以下の表は、これまで本訓練を行ってきている学校と地域の実態と、訓練の継続状況をまとめたものである。この表から、本訓練は多様な実態の地域や学校において実施できることが分かり、本プランが汎用性を持ち得ているものであると考える。

学校名	地域特性の概要	生徒数	学校支援組織	生徒主導の地域防災訓練
A中 (丸森東中)	中山間地域で、少子高齢化と過疎化、兼業農家が多い	約 50人	丸東・改援隊 (隊長：PTA 会長) (名誉隊長：公民館長)	H21～H22 (H24.3 廃校)
B中 (金ヶ瀬中)	県南の中心地近郊で、跡継ぎ不足で農業が衰退	約 100人	金未来隊 (隊長：公民館長)	H22 から継続 実施
C中 (南吉成中)	仙台近隣の丘陵地で、大規模宅地開発されて二十数年経過	約 320人	チームMY・SP (会長：連合町内会長)	H25 から実施

※ 連合町内会長とは、学区内の7町内会を束ねる町内会長の代表者

また、本プランの継続性については、B中がH22年度から継続して実施されているものの、A中については廃校となり途絶えてしまった。

A中はH23.3.11の大震災で校舎に亀裂が入って使用できなくなり、H23の4月の学校再開はA中から約6km離れた中学校の教室を間借りして授業を始めることになった。このため、H21から行っていた「中学生が主導する地域防災訓練」はH23年度から出来なくなり、H23年度末にA中は統廃合により廃校となった。このことを鑑みて、A中については大震災がなければ、本訓練が継続して実施された可能性が高いものと考えられる。

以上のことから、A・B両校の実施状況を踏まえ、中学生が主導して学校支援組織が補佐・支援する地域防災訓練には、継続性があるものと考えられる。

今後、本プランの汎用性と継続性については、C中でもH25年度から本プランを実施していることもあり、さらに追究していく。そして、本プランにおいては、汎用性と継続性に必要な要因・要素を今後とも明らかにしていく。

(自由記述：1/3)



2、本プランの有効性と発展性の追究

本プランにおいて、これまで3校で行ってきた実践プログラムのねらいや実践概要について以下の表にまとめる。なお、本プランのメインは以下の表中のN4「中学生が主導する地域防災訓練」であり、その実施に当たっては地域の既存組織・団体等からなる学校支援組織を発足させ、中学生の訓練実行班を分担して補佐・支援するものである。

そこで、生徒が科学的知見や教訓から震災を学び、復興支援等を体験的に経験しながら大震災で何が起きたかを知り、そのためにどのような備えが必要かを考え、体験学習によってそのスキル等を習得する。この学習プロセスを受けて、知識やスキル、関心や意欲を高め、中学生が主導して地域防災訓練を行う。これらのことにより、訓練の成果や効果は向上するものと考え、本プランが有効性を持ち得ることを確認できると考える。

	実践プランのねらい		実践プランの内容	実践の学校		
				A中	B中	C中
1	震災を学ぶ (専門家の講演)	地震を学ぶ 教訓を学ぶ	東北大学地震・噴火予知研究観測センター長の講演(講師:海野教授) 津波被災農家の方々の講演(講師:若林区荒浜の被災農家)	○	○	○
2	復興を知る・学ぶ	復興支援の活動を行う	津波被災した中学校の復旧支援活動 津波被災の農家に弟子入り体験学習 仙台復興シンポイイベントを支援する清掃奉仕活動		○	○
3	震災に備える	備蓄食材の栽培加工	農家に弟子入り体験学習 手作業で稲作(田植え、除草、稲刈り、脱穀) 梅干し造り(収穫、天日干し、シソ漬け) みそ造り(大豆種まき、除草、収穫、加工)	○	○	
				○	○	
				○		
		地域特性リスクを学ぶ	学区内ハザードマップの作成	○	○	○
		防災スキルを習得する	校内・炊き出し調理コンテスト			○
	避難所の設備を整える	移動式・かまどベンチを作成(普段はベンチ、有事に“かまど”で使用)			○	
	備えを調べる	10テーマ別の学習と発表(リスクとハザードの調査と対応方法を調査)			○	
4	訓練を行う メインプラン	支援組織と訓練の検討 (企画・内容・計画・実行)	生徒が訓練の企画・内容・計画を策定し、学校支援組織と協議・検討 (学校支援組織は、生徒による訓練実行に向けた助言と補佐を事前に決定)	○	○	○
		中学生が地域防災訓練を行う	中学生が主導して地域防災訓練を実施 中学生が訓練内容毎に5班に分かれ、組織が分担支援して実施	○	○	○
5	実践を広める	成果を発信	地元へ 外部へ	○		
			議会堂にて模擬議会を開催(教委職員や議員との防災関連議案を質疑) 全国に発信:防災教育チャレンジプラン、ほうさい甲子園、全国大会など 県内外に発信:ユネスコスクール県・東北大会など	○	○	○
6	評価・改善する	PDCA マネジメント	自己評価	○	○	○
			外部評価	○	○	○
			関係者評価	○	○	○

また、メインの実践プログラムN4の有効性を高めるためには、N4以外のサブとなる実践プログラムが地域特性や震災の現状等を踏まえ、中学校の実態に即して適切で創意ある実践を行う必要がある。このことは、サブとなる実践プログラムが多彩な取組になることで、本プランにおいてさらに発展性をもたらすものと考え。

メインの実践プログラム「中学生が主導する地域防災訓練」自体の発展性については、次の表に示すように、実施条件の設定によって多様なタイプに分類できるものと考え、タイプに応じて実践の難易性を高めることで、発展性が大いに見込める。

訓練タイプ	日		時		季節				学校		訓練参加者					
	平日	休日	昼間	夜間	春	夏	秋	冬	開	閉	中	小学校	PTA	組織	地域	自由
タイプA	○		○				○		○		○			○	○	○
タイプB	○		○				○		○		○	○		○	○	○
タイプC		○	○				○		○		○	○	○	○	○	○
タイプD	○			○			○		○		○	○		○	○	○
タイプE		○	○				○		○		○	○	○	○	○	○

※1、組織:学校支援組織MY・SP隊、※2、自由:訓練当日に事前申込無しで参加

(自由記述: 2/3)

3、本プランの成果・効果や課題の検証

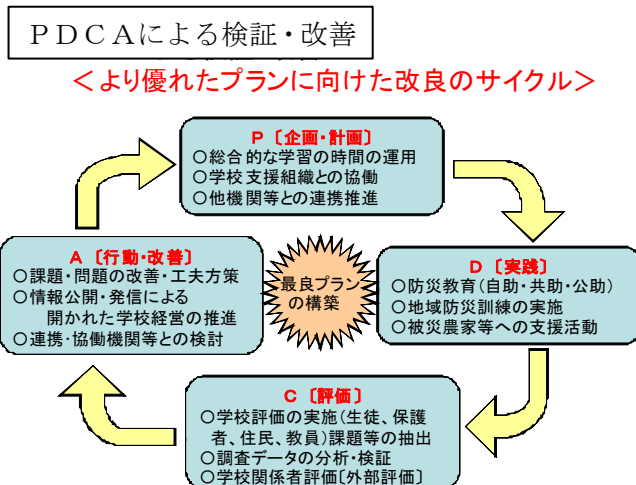
これまで「中学生が主導する地域防災訓練」は、3つの中学校で実施しており、その中学生に行ったアンケート調査から本プランの成果等を分析してみる。

NO	調査項目の内容	学 校	大いに	まあまあ	あまり	ぜんぜん
1	地域だけの訓練に比べ、学校と地域が一緒になって、防災訓練を行う必要がある	C 中	84.5	13.6	1.9	0
		B 中	54.5	42.0	2.3	1.1
		A 中	80.9	14.9	4.3	0
2	中学生が主導する地域防災訓練により、中学生は地域防災に貢献できる	C 中	88.3	11.7	0	0
		B 中	19.3	71.6	8.0	1.1
		A 中	51.1	48.9	0	0
3	本日の訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる	C 中	78.6	21.4	0	0
		B 中	43.7	47.1	6.9	2.3
		A 中	61.7	38.3	0	0
4	実際に大震災が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う	C 中	68.6	26.5	4.9	0
		B 中	35.2	53.4	8.0	3.4
		A 中	61.7	34.0	4.3	0
5	中学生が主導する地域防災訓練は、毎年、実施する必要がある	C 中	61.2	35.0	3.9	0
		B 中	44.2	47.7	7.0	1.2
		A 中	53.2	38.3	8.5	0
6	中学生や学校が地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる	C 中	84.5	15.5	0	0
		B 中	59.1	39.8	0	1.1
		A 中	72.3	27.7	0	0
7	地域や学校が一緒に様々な活動や取組を行うことは、地域活性化につながる	C 中	71.8	25.2	2.9	0
		B 中	45.5	51.1	1.1	2.3
		A 中	59.6	40.4	0	0
8	地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる	C 中	84.3	15.7	0	0
		B 中	42.0	46.6	9.1	2.3
		A 中	65.2	34.8	0	0

選択肢“大いに”と“まあまあ”をあわせた割合については、どの項目でも9割程度を占めており、3つの学校の中学生は地域防災訓練を良好に捉えていることが分かる。特に、C校については、選択肢“大いに”の割合が高くなっており、大震災後の実践プログラムの実施により、その成果や効果が影響しているものと考えられる。逆に、B中においては選択肢“大いに”の割合が他校と比べて低くなっており、慎重で過小評価しがちな地域性による生徒の性格的特性が表出しているものと思われる。なぜなら、B中の生徒たちはどの防災教育の実践プログラムにおいても、熱心に真剣に取り組み、その成果や効果も大いに得ているからである。

これらのことから、本プラン（メインとサブを含める）は汎用性、継続性、有効性、発展性において、防災教育の実践として評価できるものとする。今後、本プランの実践を続ける中で、さらに、検証の方法として相関分析や因子分析などの分析手法を用い、経年比較による詳細な分析から成果や課題等が検出できるものとする。そして、図に示すように、より優れたプランの実現に向けてPDCAマネジメントサイクルにより、実践、評価、検証、改善、そして企画・計画を繰り返していくことが重要であり必要と考えている。

最後に、今から未来に向け、防災教育を継続することは、地域防災力が偉大なる力(共助を含め、地域の安全・安心と人の絆を司るパワー)に進化すると確信している。





4. 教育実践プラン「学校と地域が協働する防災教育活動プラン

－学校・地域支援組織の設立と学社連携・融合による教育－ 実践3校の比較分析

これまで校長として勤務した中学校において、町内会をはじめとする多様な地域の組織からなる学校・地域支援組織を設立し、学社の連携と融合に基づく多彩な教育実践を展開している。この教育実践は学校教育として位置づけるばかりでなく、社会教育にもかかわる実践である。

さらに、以下の比較表に示すように、本教育実践は学校や地域の特性が異なり、担当教職員が異動しても取り組みが継続し、生徒や地域住民の教育を司ることができる汎用性や継続性、そして学校教育・社会教育の発展性と有効性を追究できる実践プラン(メイン・プラン、サブ・プランからなる)である。

この実践プランの核(メイン・プラン)となる防災・減災教育では、震災の教訓の継承とともに中学生が地域を巻き込む教育実践として展開し、地域における社会システム(公助)とコミュニティ(共助)の形成と、個々人のパーソナリティ(自助)にも波及させながら、災害文化の構築とともに安全・安心な地域づくりに向けて、持続可能な未来社会づくりとそれを担う人材育成を目指している。取り分け、防災・減災教育では、大震災の教訓から共助が多くの人命を救う結果をもたらし、共助を高め、強めるコミュニティ形成が重要である。このことから、学校教育や社会教育を連携・融合する取組は、防災・減災教育において効果的で極めて必要性が高く、これからのコミュニティの在り方として求められなければならないと考える。

学校名	丸森町立丸森東中学校	大河原町立金ヶ瀬中学校	仙台市立南吉成中学校	
1 高橋・在籍年度	H20～H21 (H24.3 廃校)	H22～H23	H24～	
2 学校規模	生徒数・約50人、3学級	生徒数・約100人、3学級	生徒数・約300人、9学級	
3 地域特性の概要と共通性	中山間地域で兼業農家が多く、少子高齢化と過疎化が進む	県南の中心地近郊に位置し、主産業の農業が跡継ぎ不足で衰退化	仙台市中心部の近隣西部に位置し、山林の大規模宅地開発で二十数年前に誕生した団地	
平日の日中は大人が職場に出かけ、地域には小・中学生と高齢者が残る。				
4 防災教育チャレンジプラン	H21とH22に採択	H23年度に採択	H25とH26に採択	
5 学校・地域 支援組織	名称	丸東・改援隊(かいえんたい) (学校教育を 改革 、 支援 する組織)	金未来隊(きんみらいたい) (金ヶ瀬 中の 未来 を支援する組織)	チームMY・SP(警視庁SPに準え) (南のM、吉成のY、 カケノ プロジェクト)
	設立と人数	H21.4 設立、メンバー39人	H23.4 設立、メンバー46人	H25.5 設立、メンバー48人(増員中)
	構成員	公民館長、防犯協会、消防団、婦人防火クラブ、行政区長、JA 婦人部、食生活改善推進員、など22組織	公民館長、同窓会長、NPO、JAみやぎ、JA 女性部、消防団、行政区長、食生活改善委員など18組織	町内会長、消防団、交通指導隊、婦人防火クラブ、老人会、民生児童委員、交番所、健全育成委員など24組織
組織の各部会	地域防災部、地域伝承部、栽培・生産部、加工・商品開発部、販売部	食品加工・商品開発部、地域防災訓練部、農業体験活動部、地域文化伝承部、学校行事支援部	地域ボランティア部、地域防災部、伝承文化部、キャリア教育部、国際理解教育部、食育推進部、学習支援部	



本・実践プランの課題とメリットについて

この実践プランは、実践サブ・プランにより、防災・減災に対する関心・意欲を高め、知識とスキル、行動・態度を習得し、実践メイン・プランを実行して防災・減災教育の評価・検証するものである。さらに本・実践プランは、地域住民とその組織からなる学校・地域支援組織を設立して実践するものであり、地域を巻き込み学校教育と社会教育を兼ね備える特徴を有する。

これまで実践プランを3校で実施し、その実績から以下のメリットを分析している。

①汎用性・・・学校や地域特性等が異なる3校で、実践プランを実行

【実践から得た実績】

防災・減災教育をどう実践するか分からない学校や悩んでいる学校、思うように成果が得られない学校などに、学校や地域特性が異なる学校においても本プランを活かすことができる。

②継続性・・・学校・地域支援組織の設立により、組織が引き続き支援が可能

【継続による実績】

特に防災・減災教育は、教訓を引き継ぐことが防災・減災において必要かつ不可欠なことであり、このことから継続性は極めて重要な要因である。また、実践プランを継続することで、卒業生が学校・地域の防災・減災の要となり、毎年その人数が増していくことで地域の共助を強め、地域防災力を向上させていくことになる。

③発展性・・・地域特性（人的・物的な教育資源）を活かす、多様な実践サブ・プランの拡充

【地域特性に応じた実績】

農業地域、商業地域、新興住宅地域、工業地域など地域特性に応じて、創意・工夫して防災・減災教育につながる実践サブ・プランを考えることで、地域特性に応じ、活かし、必要な防災・減災教育に展開、発展させることができる

④有効性・・・生徒や住民等への調査データから、成果や効果を検証

【有効性の検証実績】

本・実践プランでは、成果や課題を把握するため、実践後に学習対象者である生徒や住民、保護者にアンケート調査を行っている。この分析結果からは、本・実践プランの有効性を確認することができ、教育的効果や成果が検証されている。

本・実践プランでは、地域の実情や教育が抱える課題や問題を解決するため、その対応方略として次の表に示す内容を想定している。

NO	効果・成果	地域の実情や教育の課題	課題への対応方略
1	継続性	主となって教育実践を推進する教職員が異動すると、実践が衰退・消滅	地域住民とその組織からなる学校・地域支援組織が教育実践を支援することで、組織が実践を引き継ぎ、継続する可能性を高める



2	継続性 有効性	全ての地域住民が、防災・減災教育に参加して学ぶことは、様々な理由と都合等により困難	毎年、継続して防災・減災教育を行うことで、全ての卒業生が学び、防災訓練を担い、実行し、やがて大人になり地域住民になることから、将来的には多くの住民が学び・習得することとなる。 ----- 中学生が学んだことを家庭で親に伝え、親が子から教えらることで防災・減災教育を学び、学習者が広まる。
3	発展性	地域防災訓練を自治組織が主催すると、小・中学生があまり参加しない傾向がある	本プランにより学校が地域の自治組織と連携すること、さらには学校と地域との双方向の支援を司る学校・地域支援組織を設立することで学校と地域の状況を鑑みて地域防災訓練を行うことができ、住民と小中学生が参加することができる。
4	有効性	平日の日中、他地域に働きに出る大人が多い地域、さらには特に少子高齢化の地域では、震災が発生時に共助などの地域防災力が低下	中学生が防災・減災教育を学び、地域防災訓練を実行することで、平日の日中に震災が発生しても、地域の学校にいる中学生が地域の共助の役割を担うことができる。
5	有効性	地域の結束力があまりないために、地域防災力を高めにくい地域の解消	学校が地域防災訓練等の防災・減災教育を、地域住民を巻き込んで継続的に実施することで、地域防災力を確実に向上できるだけでなく、地域の結束力も高める可能性がある。
6	汎用性 発展性	地域特性を活かした地域防災・減災の取組を、実行が困難な地域課題	中学生が地域特性を活かした農業や産業を学ぶことで、備蓄や防災器機・システムなど防災・減災の備えと取組を地域に広めることができる。
7	有効性	地域住民の関わりやつながりに課題がある地域	中学生が地域組織の方々と一緒に防災・減災教育の取組を行うことで、住民を巻き込み、生徒と住民間だけでなく年代を超えての関わりやつながりが生まれる。
8	汎用性	義務教育で防災・減災教育を必修化することは、教科書や教材・教具等が充実しないと困難	教科書や教材等がなくても、防災・減災教育を行っている学校事例は、汎用性のある本実践プランのように少なくない。逆に義務教育の段階で全ての中学生に学びを必修化をしないことによって、防災・減災の行動や備えができない



			人々を永続的に生じてしまう課題を脹らむ結果となる。
9	発展性 有効性	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生が地域の所属感を高め、地域貢献する機会が不足 ・中学生が企画・計画・実施する地域行事が皆無 	中学生が地域防災訓練を主導することで、地域住民のために自ら主体的に活動することを通じて、地域の所属感の向上と地域貢献を図り、生徒の自己肯定感を高めさせることができる。
10	有効性	中学生が地域住民と話し合い、教え合う場と機会を設けられておらず、様々な年代の地域住民と関わり・つながることが不足	防災・減災教育の実践において、中学生が学んだことを地域住民に説明・発表（本プランでのポスターセッションなど）し、質疑することを通じて関わり・つながりを強めることができる。
11	有効性 発展性	東日本大震災における困難を克服する中で、様々な現実的課題と関わりながら、被災地の復興と安全で安心な地域づくりを図るとともに、日本の未来を考えていこうとする新しい教育の取組も芽生えています。 (H26.11 文科大臣「新しい時代にふさわしい学習指導要領等の在り方について諮問」)	本プランでは、学ぶことと社会との繋がりをより意識した教育を行い、中学生が主導する地域防災訓練等で知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習や、そのための指導の方法等を拡充させることができるものとする。
12	有効性	新たな教育実践は、教員の仕事をさらに増やし、多忙化を助長することにつながる。	本プランでは、生徒会が主体となって企画・計画・実行することを旨としており、そこに学校・地域支援組織の方々が補佐・支援をする。このことにより、教員は助言者役にまわり、課題や問題の解決は生徒会が中心となって思考、判断していく。本プランの開始1・2年間は教員等の負担は多少あるものの、おおよそ3年後以降は生徒会と支援組織が企画・計画そして実行でき、教員は裏方に回ることが出来る可能性が高まっていくものとする。

13	有効性	安全・安心な地域作りや防災力の向上は、地域だけの課題ではない	地域の安全・安心や地域の防災力は、学校と地域の共通課題・目標である。両者が連携・協働しなければ、課題解決と目標が達成されることはない。両者の共通課題・目標であるからこそ、連携・協働して一緒に取り組むことで、より地域の安全・安心が図られ、地域の防災力もより高められることにつながる。このことから鑑みても、本プランは共通課題・目標を解決して達成する上で有効で効果的な教育実践となる。
14	有効性・発展性	震災被災者の思い、願いを心で受け止め、生徒自らの心と姿勢の変容を図ることは難しい。	本実践サブ・プラン等においては、積極的に被災者の声を聞き、被災者を支援しながら被災者に学ぶ取組を行っている。この取組により、被災者の心情に触れ、生徒が自らを省みることで心に届く学びを享受している。そして、自らが“支えられる人”から脱却し、“支える人”“支え合う人”に心と姿勢を変容させている。
15	有効性・発展性	今日、親子のコミュニケーションが不足し、十分な家庭の教育力が培われにくい。	それぞれの本実践プランでは、生徒にレポートとアンケート調査を行っている。特に、親子のコミュニケーションを助長するため、レポートに親のコメント欄を設け、親の意見や感想等を記入してもらっており、子がコメントから親の思い・考えを受け止めている。このことを通じて会話が生まれたり、親子の理解が深まったりする機会が必然的に起きる可能性がある。つまり、数々の本実践プランにて行われるこのような方略により、家庭の教育力に少なからずの効果が期待できるものと考えている。
16	有効性・発展性	地域の主産業（例えば農業）が衰退し、後継者不足にも陥り、地域社会の持続や地域活性化が図り難いという課題がみられる。	例えばA中・B中では地域の主産業である農業において、昔ながらの手作業による稲作や畑作を行い、被災時の備蓄食材を加工・生産してきた。生徒はこの体験を通じて地域産業に興味関心を抱き、進学先や将来を思い描くものも少なくない。さらには、地域に伝わっていた特産品の復活や、新たな農産品(米粉製品)などの商品開発も構想する生徒もあらわれた。これらのことは、左記の課題を解消する手がかりとなる。

本実践プランによる波及的効果や成果は、実践を通じて多様な広がりが見られる可能性も秘めていることが確認できる。



3校における学校・地域支援組織の設立の手順等について

校長を歴任した3校において、実践プランを実施するため、地域住民と組織をメンバーとする学校・地域支援組織を設立しており、設立に至までの手順等について表にまとめる。

	高橋の在籍校	丸森町立丸森東中	大河原町立金ヶ瀬中	仙台市立南吉成中
	高橋の在任期間 (設立時期)	H20・21年度 (H21.4)	H22・23年度 (H23.4)	H24年度～ (H25.5)
	地域の特性	○中山間地域の農業地帯 ○少子高齢化が進展 ○少子高齢化が進み、農業後継者不足	○県南の中心地の町近隣で、昔ながら農業地帯と新設の商業施設が混在	○山林を切り開き、新たに生まれた大規模住宅造成地帯と大規模商業施設が併設 ○造成20数年が過ぎ、高齢化・核家族化
	学校の規模	生徒数・約50人、 学年一学級の3学級	生徒数・約50人、 学年一学級の3学級	生徒数・約300人、 各学年3学級の9学級
手順 ①	教職員の理解	校長が構想する新たな教育実践を教職員に理解を求める。その実施に向けて、教職員では実施困難な教育実践を実現可能とするのに必要な地域の人的・物的な教育資源を確保し、学校を支援する組織体制を整えるために学校支援組織を設立することに協力を求める。		
手順 ②	設立のための相談者で、中心となる支援者の発掘 (人的資源)	元・中学校長で、退職後に現・公民館長 ①校長が学校支援組織の構想を相談し、設立準備委員会のメンバーの推薦と選出 ※選出者は、校長が実施したい教育活動毎に委員を選出(農業体験、防災、食育) ※選出者は地域の組織の代表者(JA、消防団、町内会、民生委員、NPOなど) ②校長が選出者に準備委員会の説明と委員就任の依頼 → 設立準備委員の決定	役場職員である現・公民館長	学区内7町内会を束ねる連合町内会長で、本校の既存組織である中学校区青少年健全育成協議会の副会長(会長はPTA会長が兼務) ①既存組織の委員に承認を得て、その他の地域組織の代表者(消防団など)を追加
手順 ③	設立の経緯 (人的資源)	①学校支援組織の設立準備委員会を設立・開催(3回程度): 転任の初年度に設立...学校支援組織の活動目的・内容、実施計画等を説明・質疑して協力を依頼 ②学校支援組織を設立し、計画に沿って活動を開始: 校長転任の翌年 ③組織設立後にも教育活動によって支援を必要とする地域組織を取り込み、組織拡充 ④教育実践では、委員が教員・生徒に助言や指導の補助		①既存組織に協力支援して教育実践を実施②実践する中で、新たな地域組織を補充 ③教育実践を支援する地域組織が出揃ったところで学校支援組織の設立: 校長転任翌年 ④生徒と委員がともに活動する機会を増
手順 ④	必要な教育資源の確保 (物的資源)	①農水省や公益法人から教育助成 ②委員に、稲作・畑作の土地を借用 ③委員に、教育活動に必要な物品を借用して食品加工	①公益法人等から教育助成	②年々、教育助成で実践に必要な物品を準備 ③H25年度からの地域防災訓練を拡充
手順 ⑤	支援組織の設立	新たな組織として構成組織とメンバーを選出して設立		設立準備委員会を設置せず、既存組織を拡充して設立
備考	その他	H24.3に町立中学校の統合にて廃校	H22から教育実践が現在も継続	支援組織に新たな地域組織・企業等が参画

(自由記述: 3/3)